

創立五十周年

群馬県立渋川高等学校

滋川高等學校校歌 佐藤要夫作									
自由の子 民主の民ぞ 新らしき文化の國に 我子生く若き命を 天そと大樹の如く似て そとましく土に根を張り 此土すきに真理を播き 君見よや滋川高等學校の									
健兒一十 奮然と心を直に 學舎は橋名の如くと 居ながらに山をうろはしく 門を出て何を見たり 悠々と大川根流る 山波は光の如く おいそがけ希望に向ふ 君見よや滋川高等學校の 健兒一十 奮然と心を直に									



五十周年に当って



実行委員長 真 下 玄 永

呱呱の声をあげて星霜50年を経て校庭の桜の老木がその歴史を物語る様になりました。此の間日本の歴史は大きく又目まぐるしく変転して今日の日を迎える様になりました。朝日に映え、茜さす校舎も昔日の面影もなく一新し県下でも優秀な校舎となり、学習環境として立派に形態を整えて来ました。此の陰には校長を先頭として永年に亘る教師・生徒・PTA・同窓会・地域の方々の一致協力の推進が、その成果を見た事は勿論であります。

創立当時の一学年50名の校地はその儘で拡張されず、集約して敷地の効用を計りましたが、4倍余に及ぶ生徒の数に運動場を始め諸施設が狭溢を来たす様になりました。又、永い間に培われた本校の校風伝統を時代に即応して如何に対処して行くかも課題となって来ました。所謂物心両面共に再検討する事態に立至った訳であります。生徒の自由意志を尊重して然も薫り高い校風を守り育て、現代の教育の悩みをどの様に解決するかが問題になって来ました。人格完成の道場としての基調に変わる事はありませんが、その方法・施策には単に先生のみでなくPTA・同窓会にも大きな責務があると存じます。

50周年の記念行事としてもその点に留意し、折角の行事或は事業も永く生徒に嬉ばれ、然も心身の鍛練の具体的効果が上る様にと種々協議され検討されて来ました。

実行委員小委員会の真剣な研究の結果、第一に狭溢をかこつ運動場の解決に第二運動場を新設し、各クラブが充分に活動出来る場を作る事。第二に合宿練習或は研修の場を作る事とし、それに依り教師生徒の疎外感を払拭して団体訓練或は生徒間の親睦の為の宿泊設備を設ける事。此の二事業を重点として更に課題になっている卒業生名簿の整理、校史の編集等を実施する事になりました。

此の遂行に当って先生方が職務の傍ら誠心誠意尽して下さった事は全く敬服の至りであります。又PTAも快く大予算に取組んで下され、同窓生の方々もかつてない程真剣に募金等に御活躍下され心から厚く御礼申し上げます。

これからの生徒も此の心のこもる暖い贈物を心の中に銘記して活用してくれる事と確信しています。そして次代を背負う立派な卒業生が続々輩出される様念願して己みません。

本校の益々発展を願い関係皆様の御健勝を祈念して御挨拶と致します。 (同窓会長)

挨拶

学 校 長 飯 塚 二 郎



大正9年に本校が創立されてから本年が50周年に当たります。この創立50周年を記念するために、式典や記念事業を計画いたしましたところ、県当局をはじめ、PTA・同窓会その他特志の方々の御援助により、こゝに盛大にとり行うことができますことは、まことに感激にたえないところであります。

昭和23年当時の渋川中学校は戦後の学制改革によって渋川高等学校に移行しましたが、質実剛健や堅忍持久の伝統的精神は、戦後の民主教育の中においても、たくましく真理や希望を指向する心素直な教育精神として脈々と継承されているのであります。中学高校合せて9千の卒業生がこゝを母校と仰ぎ、互に切磋琢磨している姿はまことに美しく頼もしいものがあります。

本校創立当時と大正9年は、第一次世界大戦のパリ講和条約が調印され、国際連盟が誕生した翌年であります。人類の世界平和希求への念願は熾烈なものがありましたが、経済的動揺は激しく、教育はこれらの問題にこたえなければならない状態にありました。本県における中学校はすでに六校開設されておりましたが、この時代の教育の重要性を自覚した渋川を中心とする地域の先覚者たちによって本校はその創立を見たわけでありまして、それからの方々に深く敬意を表する次第です。ここに本校他二校が加わり、計九校が県下の中学校として戦後の学制改革までその栄光を存続させたことになり

ます。この半世紀に亘る間、中学時代には約二千名の卒業生を輩出し、郷土はもちろん全国的にも各界に亘って活躍してまいりました。後の十年間は不幸にして戦争の惨禍に遭遇し多くの卒業生を失ったことは痛痕のきわみであります。

戦後は敗戦国復興の途はたゞ教育にあるとの自覚のもとに、虚脱の中から次第に勇気を取り戻してまいりました。平和国家・文化国家を目指した出発でしたが、その後の科学技術の進歩や経済成長の発展は目覚ましく世界の驚異に値するほどでした。この22年に亘る高校時代に、全定約7千名の卒業生を送り出し、それぞれが、各界の中堅となって活躍中であることは、まことに喜ばしい限りであります。

しかし最近の教育界には多くの問題が続出して憂慮に堪えないものがあります。私どもは謙虚に過去を反省するとともに、勇気をもって新しい教育を考えていかねばならないと思います。

とくにスポーツを通して人間形成を図るための施設設備や生徒との人間的接触を保ちながら教師の適切な指導が行いうる場を設けることは緊要の事だと思います。

この度、50周年を記念して多くの方々の御厚意によって記念会館が建設され、第二運動場等が設置されることは、この意味において本校教育の一大転機であり、将来の本校発展の原動力になるものと確信いたしております。そして職員生徒一体となり、この御厚意に酬いるべく努力いたして、皆様の御期待にそいたいと願っております。何卒今後とも一層の御支援御協力をお願いして、挨拶いたします。

創立五十周年にあたりて

PTA会長 佐藤 直



歴史は進歩であるという、確かにそうだろう。だが一体我々はどこに向かって進歩しつつあるのか。進歩だ進歩だといいいながら、我々は実は破滅への道、破壊と滅亡への道を驀進しつつあるのではないだろうか。そのような悲劇が、いまこの20世紀の高度技術文明の時代において起こっているのではないだろうか。これが機械文明の悲劇であり、核兵器時代の矛盾の本体ではあるまいか。我々は文明を信じている。そしてこれを過信してしまう。文明が何もかも解決してくれるであろうという、そういう期待が実は大変な幻想にすぎないかも知れないのである。

これはつまり、文明というものが、信ずべきものではなくなって、批判されるべきものになってきたということなのであろう。

戦後20年、生産力においてはいまやアメリカに次いで世界第二位だといわれている。確かにいまや日本は豊かである。物質的には恵まれた豊かさの中に、昭和元禄とよばれる一つのムードが生まれているわけである。

昭和元禄めでたしめでたしで、日本の大都会では、何でも、無いものはない。何でもあるが、ただ、われわれがこれによって真に生きがいを感じずというものだけが無いのである。いまの大学でもそうである。大学、これこそ文明の象徴であり、最高の文明の殿堂であるわけだ。ところが、日本の、大学という大学で混乱が起こっている。これはやはり大学があまりにもメカニズム化されたからではないのか。今日の大学では、教師は教える機械にすぎないかも知れない。教師と学生との間には、人間関係というものはなくて、ただ機械的な関係しかない。お互に血の通った魂の結合はない。つまり魂なき文明、機械文明というものが生み出しているところの豊かさ、魂なき豊かさというものの本体はそういうものであろう。今やこのような大学の趨勢が高等学校えも波及しつつある。こんな空虚な人間不在の文明から一刻も早く高等学校以下を切りはなさなければならぬと思うのは私一人だけでは無いと信ずる。

幸いな事に渋川高等学校はまだまだ残された大自然の環境の中にある。我等の次の世代を背負ってもらおう高校生は広大な校庭を思いのまま飛びはねて、大自然の息吹を心として、のびのびと成長してもらいたいと思う。そして教師と生徒は教場だけの行き会いは無く、時には二者寝食を共にして、お互の魂をふれ合わせ。機械文明社会の部分品の人格を批判し得る真の文化人を育てたいと念願する次第である。此の度渋川高等学校創立50周年の記念行事の一端としての第2グラウンドの建設、記念会館の設立を以上の様な考え方から発案致したところ、幸にも諸先輩各位初め関係各位の御賛同をいただき、着々と計画を実現に移し得ます事に、我等衷心より感謝申し上げて、本記念の日の御挨拶に代える次第です。

五十周年に寄せて

● 渋中時代の追憶

旧中第一回卒業生 元同窓会長 中曾根満寿雄

大正9年渋中が町立の渋女と同時に誕生した時、地元の人達の喜びは大きかった。当時県内には県立の中学が7、女子校が5・6、工業はなく商と農の学校が5ほどあったが、生活のレベルが低く徒歩通のできない学校へ出す家庭はごく少数だったが、上級校出身が社会に出て優遇されること今日この比ではなかったから、渋中ができる地元から多数志願したこと勿論だが、入試が4月半ばに行われたので県内各地からも殺到、50人募集に180人余志願した。4月20日に開校。入った生徒は渋川11・2名、近接町村27・8名、は県内各地から、そして大半は高2卒業高1修で6卒は僅か6・7人、6卒の我は初めは年かしの友に威圧されて小さくなっていったように思う。

仮校舎は北小の東校舎の東端3教室・職員室・控室兼柔道場・教室と並んでいた。先生は専任4他4で校長は小軀乍ら古武士の風格豊かな山口県の杉原九郎先生、教歌は数ヶ月後徳山慶三郎先生の来られるまで英語も教えられた碓氷の飯塚伝吉先生、国漢に歴史は校長と共に前女から来られた宮城県の本間健治先生、書記は温厚な関口浦平先生、そして北小から体操の川田賀市先生、理・音の岸三郎先生、図・地の斉藤勘次先生、柔の石橋皋一先生等が来られた。口の悪い連中、川田先生には頭の形から「おむすび」岸先生には眼をパチクリされる所から「パチ」という異名をつけて喜こんでいた。せまい教室雑沓する校庭にいささか窮屈な思いもしたが小学校とは全く違った趣きの学校に入れて喜々として勉強し運動した。やがて「質実剛健」校訓が示され、先生方は事ある毎に君達は14生だ、渋中の将来は君達の双肩にかかっているのだと鼓舞激励され、おかしなもので、我々もいづらかそんな気持ちを胸に抱いて万事に当るようになった。瞬く間に1年が過ぎ、翌春4月待ちに待った新校舎が落成し移転した。広い校庭、木の香る校舎、今こそ本当の中学生になったような思いがした。しかし、校庭の整備も大変だった。捨っても捨っても出てくる軽石、石捨てが一つの日課になった。放課後山へ行って松や蹲躑を掘って来て植える。テニスコートも野球のグラウンドも砂場も大体生徒達の手でやった。

3年の終り、先生の陣容も整い学校の内外もかなり整備されたとき、我々が心から慕っていた杉原校長が老齢の故にやめて郷里へ帰られることになり、涙とともにお送りした。4年の新学期、大兵肥満少壮有為の声高い湯沢徳治先生を校長として迎えた。先生は「私はこの学校の学力向上を第一の使命として赴任した」といわれ、修身科の他高学年の数学は自ら担当された。先生は指導力抜群、大いに絞られたがメキメキ力がついていくのがわかった。学年の終りに4人の級友が上級校に受験した。一高と共に天下の難関といわれた一ツ橋商大に2人、二高・陸士に1人宛、そして吉田徳次郎君が一ツ橋に、角田守平君が二高に、県内から17・8人受験して陸士にたゞ1人合格したのが丸岡茂雄君であった。創立日の浅い渋中何するものぞたかをくくっていた県下諸学校の方々はおつけにとられたらしく先生方も大いに面目を施したわけである。我々もこの成績に大いに奮起した。1年は惣ち過ぎて卒業、このとき一緒に証書を頂いた人は前記3人を含めて37人、他の人々は遠隔地から来ていたので地区の学校に転校したのである。この町の上級進学は前年のようにはいかなかったが、それでも一浪を加えて官公立校には新潟医大1、宇都宮・福島・上田の高専に各1、上海の東亜同文書院1、東京高師教員養成所1、豊島師1、群師2、私大では慶応医学部1、法学部1、早大2、中大1、法大1、国学院1、歯科医専2でまああの成績であった。

我々は卒業後も母校に特別の親しみを覚え、事あるごとに母校を訪ずれ、今も年に一度はクラスとして集まり、3年ごとに初めは3回卒まで、最近では五回卒まで合同のクラス会を催し、思師もお招びして昔を偲び今を語り懐旧の情を温めている。私もすでに60の坂を越したが母校の順調な発展を願う

心には変りがない。微力ではあるが何かお役に立つことがあればと切に思っている次第である。

●母校の原型

旧中第1回卒業生 角田儀平治
弁護士

創立が1920年だから1970年といえまさに50年、半世紀前の開校当時の思い出はまことになつかしい。

「4月20日、渋川小学校内仮校舎において開校」これが母校の歴史のまさに一頁である。先生が3人、生徒が50人、教室・職員室・生徒控室が各1室、これがそのすべてであった。50年後の今日、教職員54名、校舎19棟、その面積7,947平方メートル、生徒数全日制と定時制合せて1,450名、卒業生も近く1万人になろうとしている。これは母校の量的な発展である。

さて、質的にはどうであろうか。質的にも向上しているであろうか。それとも低下しているのではあるまいか。母校の教育の現状に暗い私は判断に苦しむ。

教育の二大要素は、権威と自由である。教育の場に権威が失われ、自由がなくなるとき教育そのものが死滅する。初代校長杉原九郎先生は山口藩士で、維新の志士を思わせる風格があった。開校式の式辞を述べたあと「私のこの教育方針に反対の父兄は直ちに子弟をつれてお帰りなさい」と言いきる勇気と自信をもっていた。一方、「生徒は制帽をかぶるべきや否や。かぶるとしたらその徽章はどんなデザインにするか」などと細々したことまでよく職員や生徒に相談され、極めて自由で民主的であった。「校風をつくれ」「質実剛健であれ」「美的情操を養え」などという教育方針のもと、先生と生徒が全く一身同体となって勉学にスポーツに日夜精励した。「母校の原型」まさにここにありといいたいところである。

第1回卒業生は37名で、死亡者9名、生存者28名であるが、同じ思い出をなつかしみ、同じ思い出に生きている。故人曰く「思い出を賛美する者は幸せである。個人生活の中で思い出は生きていく上に欠くべからざる要素である。」と。私は母校の思い出を賛美しその思い出を生活の要素にして生きてきた1人である。

●偶 感

旧中第11回卒業生 群馬県観光協会々長 木暮武太夫

戦前の渋川中学校はポケット無しの小倉服に裸足と云う質実剛健の学風そのままに軽石だらけの校庭を走り廻っていたものでした。たまたま戦後愚息2人が渋高に入学したのでPTA会長の大役を引受けて数年つくづく戦後の教育、生徒の気質全てが戦中時代と違うことを身を以て体験しました。

3代の校長、数十人の教職員と付き合い教育界と我々社会との違い、特に運営面に於ける管理者の苦勞等身を以て知り私自身大いに参考になりました。

近頃ドラッカーが断絶と云う言葉を使いマスコミが取り上げて以来全国至るところ流行語の様になって居りますが我々の時代にも断絶はあり、こと更に戦後教育の結果とばかりは云えないと思います。血は水より濃いと云われる血縁の間で真の断絶などあり得るわけがありません。

そんなことより戦後親達の自信喪失が現在の若者をして、あらぬ方向に走らせているのではないのでしょうか。今日の若者をして学校教育の結果と非難する人々が居りますが私はそんなことより自信喪失の親に依る躰の不備が招いた結果と思って居ります。

私は会長在任中機会ある毎に父母に対し、貴方の生んだ子供です自信を以て子供の躰をしなさいと呼びかけて来ましたが既に虎が野に放たれた様な状況では如何んとも出来ない方々が大部分の様で真に残念の極みでした。

親ばかりで無く日進月歩の教育水準に追いつけず内心自信喪失している教職員がどの位いるかわか

らないと思います。之等が若い者の不満となり導火線となっていることは明かです。渋中渋高と50年の歴史を迎え様としている今日、真にこの50年の歴史を祝う心があるならば同窓生1人1人が俺は渋高出身だと胸を張って云える様に関係者一丸となり渋高の名を天下に示していただきたいものです。毎年3月卒業期の新聞記事を見るのが恐ろしくなる様な渋高では同窓生としての誇りも何もあったものではありません。

50年記念事業として同窓会館も建築される様ですがこの運営に関しても功成り名を遂げた人々の単なる社交的集会場所にする事なく戦後の新らしい感覚を持った人々の運営の基に心から在校生と結びつく様な会館運営を願って止みません。

● 母校五十周年にあたり

新高第1回卒 榎本清茂
同窓会副会長

「人生50年流転のうちに較ぶれば夢幻の如くなり」と謡った織田信長の言葉を借りる迄もなく、50年の歴史はいろいろの事象の締めくくり、反省に恰度よい時期である。1920年我国第1回の国勢調査の年と共に産声を挙げた母校が本年50周年に当り、旧渋中2千名、渋高7千名の同窓生、母校職員、在校生等関係者一丸となって開校以来の巨大な記念事業に打込んでいるのも亦むべなるかなである。国民精神総動員の掛声の下、軍事教練、農作業、軍需工場動員、防空壕掘りに明け暮れた挙句、昭和20年8月15日の終戦を迎えたのは、渋高1回卒の吾々が旧渋中3年生の折であった。来英撃滅の軍事政策の犠牲となって幾多の若い命が海に陸に空に散った。その日本人の平均寿命は僅か20才そこそこだった。以来25年後の今日、その寿命が70才を超す現実には誰しも驚異の眼を瞠るであろうが、併し“白砂青松”“山紫水明”のみづほのくには今や人類の集団自殺一步手前の公害に悩まされ、衣食住の条件凡てに安心して生活出来る環境を、より手の届かない山の彼方に消し去ろうとしている現実に思いを致す時、国民総生産額世界2位の甘い呼び声に躍らされるの愚に、マスコミならずとも背筋の寒くなるのを覚える。

「質実剛健」それが大正9年以来の群馬県立渋川中学校の校風であった。内村鑑三が「上州人」と題した無韻詩、「上州人無智又無才、剛毅木訥易被欺、唯以正直対万人、至誠依神期勝利」がその心だろう。当時の渋中は白蟻の為、木造校舎に沢山の支柱があった。校庭も狭く、段のついた校庭の西北隅に相撲場もあった。その頃、進学も、陸上競技やテニスも県下では知られた存在であった。生徒自体に何よりも選ばれた者と云うプライドがあった。自信があった。昭和23年渋中24回卒。昭和24年渋高1回卒の吾々は戦前、戦中、戦後の教育の最も混乱した時代に遭遇した為に、或時は農村や工場に、又或時は軍馬の飼料刈りや飛行機の掩体壕作りに、空襲警報の鳴る度に我家と渋中と金井山麓の間を行ったり来たり、薯粥やモロコシ汁で餓えをしのぎ、現在もて余している古米、古々米など嘘の様な勿体ない話。勤労奉仕でタマのおやつに白米の小さい握りめしでもあれば眼の色が変わったものだ。それが終戦、途端に教育方針が手のひらをかえす様になり、今迄の敵国の取扱いが天皇以上の存在となり、出来損いの教科書やら不馴れな単位授業に眼を白黒させ、PTAやらホームルーム、カリキュラム等の新語が夥しく日本語の中に迄入って来た。陸士、海兵よりの復員組も混った大学進学も一しきり続いた後、新制度下の大学入試が形式的に整ったのは終戦後3年位たってだろう。

此処数年いろいろの話題をふりまいた本校の卒業式も、関係者間の理解が進み、次第に落着いた学園の雰囲気となりつゝある事は、何よりも喜ばしい。本年の卒業式で、社会の正しい認識と郷土愛の眼を開き、人生に生き甲斐を見出し、人間関係基本のエチケットを身につけよ、の3点が県教委の祝辞で述べられていたが人間として生きる当然の道を示したものである。零才の平均余命70才になった吾国で“50才を迎えた母校”の同窓である吾々は、真剣に



志を立て努力する一方、無病息災は望み得べくもないが、せめて一病息災、病を味わう心を養なうゆとりを持ちたいものである。素直な心を持ちたいものである。

●学ぶ場所を得た喜び

定第4回卒 永井良三
同窓会副会長

私は、渋川高等学校の開校50周年祭に当り、此の喜びを数多くの同窓の皆様方と共に分かち合い、更に今後の渋川高等学校に弥栄えあらんことを願いつつ、ここに寄稿致しました。

私は、戦後の学制改革による定時制課程併置によって学ぶ場所を得た者の一人であり、そこでの経験は、定時制に学んだ者でなければ理解できないことであり、経験した人のみが知り得ることであり、ました。

昭和26年4月、定時制の生徒として登校が許され、学ぶことが始まったのでありました。そこに集る生徒の服装は種々雑多で、昼間の働く場所こそ違えど、学ぶ意志の通った者が寄り集る寺小屋授業であるかの様で、私たちはそこへ、本を片手に小走りに登校したものでありました。親元から、父兄からの学費で勉強に励む者とはまったく異なる立場であることから、思い悩むことも多々ありました。そして、それらは今の私にとっては楽しい思い出にしか外なりません。年令26才にして、4年間の勉強の中で良き友を得、よろしき先生の指導の下に本を読み、質問を繰り返し、話し合った事が昨日の事のように胸中をめぐり、思いを脳裏に深めているのが今の私であります。特に在学中に面白かった事もなく、つらい事もなく過ぎてしまったが、唯、無事に卒業できた事が一番嬉しかったと当時を思い出します。

そこで今私は、学びつつある人と、卒業した皆様方と、今後渋川高等学校の門をくぐるであろう生徒の方々が話し合える同窓会を更に発展に向けて進みたいものと念願しております。50周年祭を迎えるにあたり、数多くの幹事の方々の努力によって、今後の同窓会が更に力強く発展することのみが私の願いであります。

私のつたない文章では皆様に御理解いただけない点もあり、また、定時制のあり方がいかにむずかしいものであるかも御理解いただけないかもしれません。しかし、多くの定時制に学んだ人々が学ぶことよりも通学することに苦勞を重ねてきたことと思います。そしてOBとなった現在、定時制出身者のどれだけの者が母校の事に関心をもっているかが、今後の同窓式のあり方にも大きな問題として考えさせられます。私は定時制の者のみで話し会える場もあつて良いと考え、そのような会の実現を願い、とりとめのない文ですが、そのためにも更に奮起することを約し思い出の一頁に当てます。

●五十周年を迎えての思い出

前本校定時制主事 小川伊八

私が旧渋中に着任したのは昭和18年の夏、太平洋戦争の真最中、戦況は苛烈で容易ならぬ様相を示していたころである。この年から終戦後の数年間に至るまでが強く印象に残る。先ず、一億総躍起勝つまではのかけ声に、生産と奉仕、貯蓄献金にと追いたてられた。我々は生徒と共に近隣諸郡の農村へ、或は飛行場建設に動員された。生徒は配給のカーキ色学生服にゲートル巻き、下駄に素足、靴で通学した。授業は軍事教練が中心でその上配属将校がにらんでいるので学校は兵営と同様、一々拳手の札が行われた。体育も体力テストが重視された。一般教員も強硬になっていった。学科授業も生徒は従順であった。それは駄弁したり、いたずらすると頭を小突かれ、又は廊下に直立させられたからである。

19年4月から学徒動員令によって、渋中生も中島飛行機製作所尾島工場へ入寮、1週間交替で学校

の授業と勤労奉仕が行われた。小麦と大豆と、つなぎに米粒がある食事、生徒も職員も腹をこわすもの続出。ここに動員された4・5年生は専門学校や旧制高校への進学を控えて、満足な授業もしてやれなかったことを今でも口惜しく申訳ないと思っている。しかし学校に残っていた生徒の中で、校庭に掘られた防空壕に入り配給のタバコを喫って一網打尽になり、痛く灸をすえられた元気の悪者達もいた。20年の4月には工場疎開によって渋中校舎も学校工場となり、昼夜交替制で新3・4年生が動員された。戦局は不利、本土空襲は連日に及び、警報の度に庭に山へ避難、その上原材料乏しく、生産など思いもよらず、学校らしき生徒らしきものも失われ、極度の窮乏状態に追いつめられていた。終戦となったが、衣食住に迫られ、且つ虚脱状態にあるときすべての思想統制は撤廃され、人権尊重と民主教育が呼ばれた。このような空気は生徒にも反映し、戦時中抑えられていた反動として、学校教育方針や先生方に対し抗議するようになった。21・2年頃のある日、校庭朝礼台前に全校生徒集会が開かれ、「学園の自由」を呼び、先ず「長髪を許可せよ」と学校へ要求、責任者を出せとのこと、係の関係で私が壇上にて応対、かなりエキサイトしたが今のゲバ学生程ではなかった。

学校教育では、地理・国史・修身の授業は停止され、教科書はいたる処塗りつぶされ、日本史の代りに太平洋戦争史（総司令部編集）を教えることを強制された。22年から学制が改革され、社会科が課せられることになり、高校は23年からであるが、これは何をどう教えるか見当つかず、止むなく私達関係者は文部省へ直接教科内容について教えを乞うたが文部省でも苦心していたようであった。この年に現在の渋高の徽章が作られた。生徒の意見もきいたが最後に長野先生によって図案化され、榛の木の実と水沢山を配したふさわしいものになった。

23年渋高となったが、教科書も服も靴も配給、学校で使用する用紙も古答案用紙の裏を使うというみじめな内容であった。学期は前後二期制週5日制を途中から実施、教員は再教育講習に狩り出され教員適格証が与えられた。9月初めの会議で定時制普通科1学級設置と決定。授業は1年を通じて午後4時半より午後7時半まで、週5日制とした。9月末に銚衡した処、予想以上に集まり、初めの不安はどこえやら、60名合格として出発した。24年にはレッドパージの問題がおり、職員間の問題に対し、生徒達は全校自治会を開き、学校へ抗議し釈明を求めるなどの事件があった。これら機会に思想的にも行動的にも急進化する者が出て、校内がざわめくこともあった。他方、この年の秋に創設間もない野球部が、乏しい部費に苦勞を重ね遂に西毛高校リーグ戦で優勝したことは部長として懐かしい思い出である。こうして生徒の士気もあがる一方、生徒の自主的な調べで発表する授業も行われ、授業中盛んに先生に質問し、手こずらせる左翼ばりの生徒もいた。25年には創立30周年記念行事が行われた。生徒の保護者による物心両面の熱心な援助で盛大な文化祭、運動会、バザーが行われた。当時は娯楽に乏しかったためか、町はもちろん、近隣の村から多数の参観者があふれ、占領下のうっとうしさから解放されたような味わいであった。27年3月、本校に6ヶ年いた生徒の最後が卒業し、渋高も本然の姿を迎え、進学への教育が益々熱心に推進されていった。

● 創立五十年

現 職 員 長 尾 輝 景

過去を遠くまでふりかえれば、それだけ遠く将来を見透すことができるとは、チャーチルの名言である。明治は百年を過ぎ、本校が創立50周年を迎え、その発展を正しく見据えると共に、将来の発展を希うものである。本校の源泉は渋川を中心とする関係14ヶ町村の要望である。大正9年渋川小学校の1画に呱呱の声を上げてから50年の歴史を回顧して更に新しい発展の礎石とすることは、今日の時点において意義深いものがある。小学校の西隣八千坪を地ならし、利根川原から職員生徒が石を運んだ。松の木を有志寄付者のところから大八車で運んだ。梅・桜・杉・竹と植樹した。芝を植えて手入れをした。石を拾い運動場を整備した。校舎・控室・理化室・講堂・校長公舎が次々建ち寄宿舎済美寮

が出来た。その建設の労苦愛情が骨組みの太さにも校庭整地の様子に深くにじんできている。移り変わる世に処して本校発展への関係者の努力は身に沁出たものがある。

さてその間に1万人に近い卒業生を世に送り、多数の人材を輩出したが、それを育くまれた先生方のご辛労と常に変ることなく暖かい心を寄せて協力して下さった地域の方々に心から感謝をささげたい。先輩の労苦をしのびその業績を継いで今後の発展を期する覚悟をかため、努力を誓うものであります。

新制度高校教育の課程を通し、人間形成の場として近年改築、鉄筋三層楼の巍然たる新校舎の実現を見ました。外観の整美に努め学園としての姿も一段と立派になり、ゆるぎない心の拠り所となった。在校生は勿論、卒業生も地域の方々も本校の名を心から誇りとし、信頼し真にお愛し下されたく、それに応えてこそ50周年の記念は成るのであり、本校の生々発展はとどまる事がないであろう。

回首渋高五十年 志学垂教万人中 抱志四方伸鵬翼 天為邦家開学窓
文運日隆叫快哉 志在四方同窓開 至誠一貫好学習 榛嶺山色青崔嵬
天長佳節浴瑞章 咫尺尊顔感激強 玉音朗々尚在耳 挺身教育髮如霜

●創立五十周年に会して

在校生代表 松 本 光 博

渋高！群馬県立渋川高等学校は創設以来すでに50年目を迎えた。そこでこれを機に渋高の現状と展望についてしるしてみようと思う。

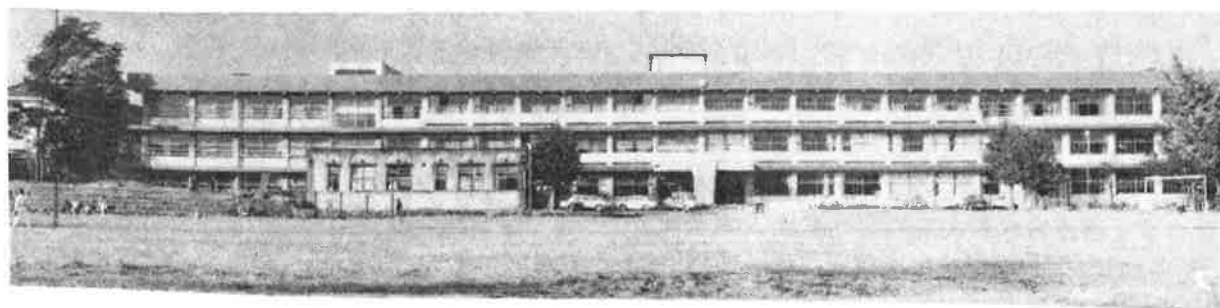
大学受験という点では、昨年度の現役合格率は4割にみえない。他方運動部・学芸部の活動についてみると、いくつかの部はかなり活発に活動しているが、全体としてはまだまだである。部に所属していながら実際には活動しない、いわゆるユーレイ部員が多いのが主な原因である。生徒会活動にしても、限られた生徒だけにまかされている。

ところで、クラブ・生徒会活動に積極的でない者は熱心に勉強しているかということ、そうは思われない。多くの者が三無主義（無気力・無責任・無関心）に陥っている。高校生活は灰色だといっているが、何もしようとしない。

しかし、このような渋高にもよさがある。それは「自由な校風」である。この自由は過去50年にわたって育てられてきたものである。だからといってこのままでよいというわけではない。私たちはこの自由をもっと大きく発展させる権利と義務をもっている。

しかるに、現在、前に述べた三無主義が横行し、他人の立場を理解しようとせず、放漫な行動をとるものが目につく。（私もその1人かもしれない）自由と放漫とを混同してはいけない。放漫は自由を内部から切り崩し、逆に規制を強めることになる。

このままの状態では渋高の自由な校風は崩壊し、化石としてのみのこることになりかねない。以前に比して先生も生徒もあらゆる面で積極性を失ってしまったのではないだろうか。自由ほど崩れやすいものはない。今こそ自由を再確認し、さらに先輩や先生の助言なども取り入れ、より自由でしかも統一（権力や規制によらない自主的な統一）のある真理の探究を目的とする学園にしたいものである。

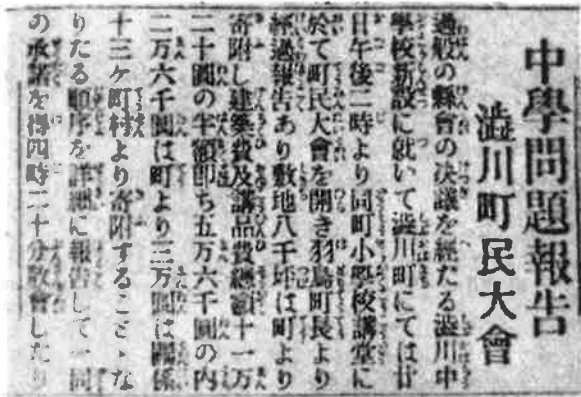


五十年のあゆみ

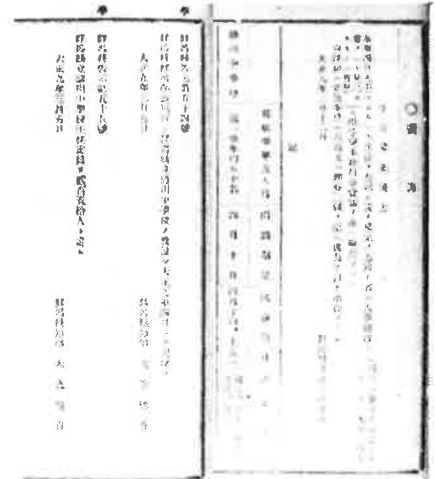
1920～1970



	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
大正 8 年	11.10 渋川町有志が中学校設置について県に請願 12.18 渋中設置の建議通常県会において満場一致で可決される。 12.20 中学校設立問題について町民大会を開き町民の賛成を得る。 12.25 町役場に渋川中学問題調査会を設け委員10名を選任する。	3.24 育英資金規定きまる 4.23 第15聯隊シベリアへ出兵 4.25 利根農林学校開校 7.28 米暴騰に対して県告諭 9.25 県議選 渋川町青木氏当選	2.7 中学校令の改正 3.1 東京で普選要求のデモ 3.2 コミンテン創立 3.27 結核予防法公布 6.28 ベルサイユ講和条約調印
大正 9 年	2.23 渋中設置について文部大臣の認可がおりる。 県は告示54号をもって渋中設立を公布 4.14 入学志願者の選抜試験を開始 4.20 渋川小学校講堂に於いて第1回入学式を挙行する 5.6 斉藤勘二先生の図案により帽章を制定 テニスコートの設置を始める 6.3 帽子に白筋を付することを命じる 9.20 師団兵器部より銃39挺伝達される 11.8 本校敷地の地鎮祭を行なう 12.12 新校舎上棟式を行なう	3.31 桐生高等染織学校桐生高等工業学校と改称 4.1 前橋商業 渋川 吾妻実科女学校開校 4.3 金井発電所起工式 8.30 伊香保町大半を焼く 9.10 渋川町貧童保護会発足 9.25 第1回中等学校訓練研究会行なわれる 10.30 社会教育主事おかれる	1.10 国際連盟正式成立 1.13 東大で森戸事件おこる 2.6 慶応、早稲大設立認可 5.10 衆議員総選挙 政友会絶対多数 5.24 尼港事件おこる 10.1 第1回国勢調査 12.9 日本社会主義同盟結成 カリフォルニア州で排日土地法実施
大正 10年	4.27 本校舎生徒控室など建築落成したので、移転する 東門2つ完成 9.11 電話始めて入る 番号120 12.2 県下最初の公舎として校長官舎落成なる	3.29 渋川文化会生れる 吉野作造氏講演会もたる 7.1 上越南線渋川まで開通 11.1 「種をまく人」発刊	11.4 原首相東京駅頭で刺殺される 12.13 ワシントン会議で4ヶ国条約調印
大正 11年	3.29 告示81号により本年度より10学級定員500名となる 8.1 3年生富士登山を行なう 10.1 寄宿舎状況視察のため県下各中学へ先生方出張する 11.15 寄宿舎落成 済美寮と命名する。看板の書は長尾先生による 11.20 このころ校友会が設立された	6.10 渋川学問研究会活動盛ん 本校教諭も活躍 11.2 学制頒布50周年式典 渋小講堂で挙行 12.30 渋川憲政会演舌会 12.30 金井発電所完成	3.11 平和博覧会東京で開催 7.15 日本共産党非合法に結成 10.25 沿海州より撤兵完了 10.28 ムッソリーニ内閣成立 12.30 ソビエト社会主義共和国聯邦樹立宣言
大正 12年	4.1 杉原校長退職され湯沢徳治氏着任 寄宿舎この年から開放される 4.6 学級に組長副組長制度を設け、その任命は校長室で行なう 4.20 第3回創立記念式 あわせてマラソン大会を行なう 5.30 講堂奉安殿が落成する 9.7 大震災義捐金83円15銭を職員生徒で拠出する 10.17 第4回県下師範中学連合武道大会に本校初参加 12.26 御真影奉載式を挙行する	1.18 北群馬武徳殿演武始め 1.28 渋川文化会講演会 竹内時男氏 4.1 郡制廃止 渋女など六校県立へ移管 5 市立前橋工業創立 7.12 群馬青少年団結成 8.12 桐生に国粋会事件起る 9.2 前橋市方面委員設置を決定	4.3 「赤旗」創刊 9.1 関東大震災 9.2 朴烈陰謀事件発覚する 9.16 甘粕太尉大杉栄を暗殺 11.10 国民精神作興に関する大詔渙発 12.27 虎の門事件おこる 山本内閣総辞職
大正 13年	4.19 開校5周年祝賀記念式を行なう 校内学芸発表会 競技会を催す 6.22 小学校火災につき職員舎生等書類荷物の持出しを準備 5.4 5年生7泊8日の関西旅行に出発 4年以下は桐生に遠足	1.25 北群馬郡小作人大会 2.1 渋川民衆高等学会創設 3.31 上越線沼田まで開通 4.20 堀口藍園贈位報告式 6.22 渋川小学校焼ける	5.27 憲政擁護国民集会 7.1 メートル法の使用開始 7.13 小作調停法成立 10.30 第1回明治神宮競技大会開かれる



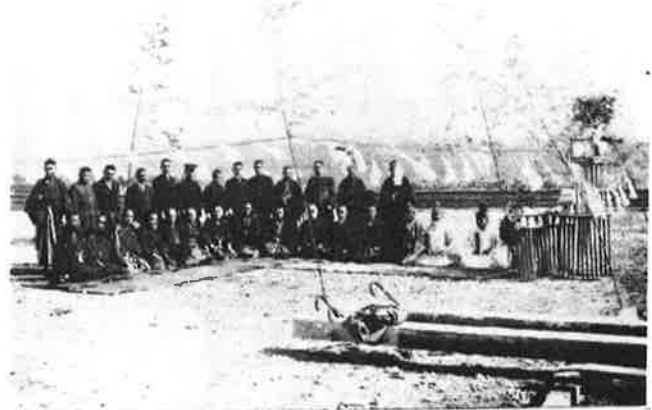
澁中設立のための町民大会
(大正8年12月の上毛新聞)



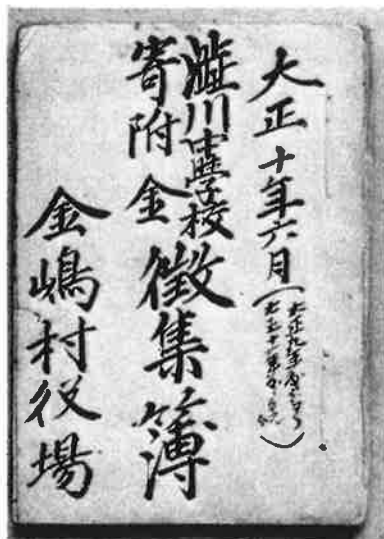
澁中設立、生徒募集の県報
(大正9年3月)



初代校長 杉原九郎氏



地鎮祭(大正9年11月)



地元町村よりの設立寄付金



大正10年頃の澁川町内風景

	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
大正 14年	6.24 庭球コート野球場土入れ工事を終る 10.17 1泊2日で赤城登山を行なう 11.3 体育デーとして陸上競技会を行なう 11.22 発火大演習を明治村で挙行 2.21 卒業生に対して予餞会を行なう 3.2 第1回卒業式 卒業生33名 4.21 初めて配属将校鈴木大尉が着任する この年から教練が正科に課せられる 5.20 棒高跳の設備成る 7.29 剛健旅行隊3泊4日の予定で出発する 9.17 この年から軍隊宿泊を2泊3日で行なう 10.7 新校長樋口安一郎氏新任式 11.3 第1回大運動会を挙行 11.10 教練査閲が行なわれる	9.1 信愛幼稚園創立 10.5 全群馬水平社大会 1.18 世良田事件おこる 1.25 群馬郡水平社創立 4.1 沼女など県立移管 6.6 前橋渋川間バス開通 7.8 高崎市会県庁移転につ いて密議をこらす 8.25 サンフランシスコの町 設立 12.21 世良田事件に判決下る	10.31 大日本聯合青年団結成 11.2 東京市電従業員スト 4.11 陸軍現役将校学校配属 令公布 4.22 治安維持法公布 5.1 運縮始まる陸軍4個師 団廃止 5.5 普通選挙法公布 7.12 東京放送局本放送開始 10.4 大日本地主協会設立
大正 15年	5.6 5年生前橋小出河原で行なわれる学生連 合演習に参加 8.25 夏期特別授業を始める 9.14 県下中学野球大会に初出場沼中に惜 敗 10.22 45年生相馬原における連合演習に参 加する 12.6 八幡宮にて全校生徒天皇病氣平愈のため 祈願を行なう	1.16 治安維持法により学生 運動の中心人物検挙 6.5 伏見宮を渋川駅に歓迎 7.1 県に学務課を設置 9.18 草軽電鉄開通する 11.26 上越線後閑まで開通 12.18 八幡宮で天皇御腦平愈 祈願式	1.20 共同印刷争議 4.20 青年訓練所令公布 7.1 群役所廃止 10.7 日本農民党結成 12.5 社会民農党結成 12.25 大正天皇崩御
昭和 2年	2.7 大正天皇御大葬遵拝式を挙行 5.19 コンクリート校舎増築陳情書を県に提出 6.12 野球部勢農へ遠征 この年各部とも活動 が盛んで遠征ばかりである 8.16 全校生徒交替で榛名キャンピング 11.2 秋季運動会 この時団の優勝旗が制定さ れる 11.20 自動式電機時報装置を新設する	3.24 県臨時教育調査会発足 4.12 県立盲啞教校創立 5.1 県下初めてのメーデー 6.30 群馬社創立 9.25 普選後初めての県議選 11.13 第一回県下中等学校連 合競技会行なわる 12.3 大正橋墜落	4.22 モラトリウムに関する 緊急勅令公布 4.29 大日本女子青年団創立 5.28 山東出兵始まる 6.20 ジュネーブ軍縮会議開 かる 8.13 NHK甲子園初めての 実況放送
昭和 3年	1.23 特別教室2雨天体操場西側70坪を増築 落成する 3.5 校地の周囲に杉柏櫨1000本を植える 3.20 狭窄射撃場を八幡山に新設 この年より 軍事教練教化される 4.1 中曽根都太郎氏校長として着任 11.5 御大典記念として校旗制定 資金は渋川 町羽鳥資氏の100円に依る 11.10 新帝御即位奉祝式	1.30 入試に身体検査を重視 することを県通達 3.9 大正橋着工 3.21 桐生高工に機械科設置 4.9 県庁改築落成 4.16 思想問題に対して告諭 10.5 御真影伝達式 於県庁 11.10 上毛電気鉄道開通 12.12 群馬県体育協会生れる	2.20 第1回普通選挙 3.15 日共全国的に大検挙 4.16 東大新人会に解散命令 6.4 張作霖爆死 7.3 特別高等警察機関を新 設 11.3 最初の明治節を行なう 11.10 天皇即位大礼式を行な う
昭和 4年	5.19 近県中等学校庭球大会において庭球部優 勝する 9.15 県下中等学校庭球大会において庭球部優 勝 この年部活動がめざましい 10.20 県下中等学校聯合競技会において競技部 前年に引き続いて優勝 10.21 校訓を改訂する 11.18 五年生70名水戸における陸軍大演習の御 親閲拝受におもむく	4.16 県内共産党員検挙 5.30 教育振興委員会設立 7.1 農民の不況深刻 8.20 伊香保榛名ケーブル開 通 10.30 大正橋竣工 11.29 群馬会館落成式 12.19 清水トンネル開通	4.1 広島東京文理科大学 東京大阪工業大学開校 4.16 日共党員全国的検挙 8.28 浜口首相緊縮政策を発 表 10.24 世界恐慌始まる 10 小学校教員連盟結成



白根山へ剛健旅行(2回生)

第1回卒業生一覽表
(大正14年3月2日)



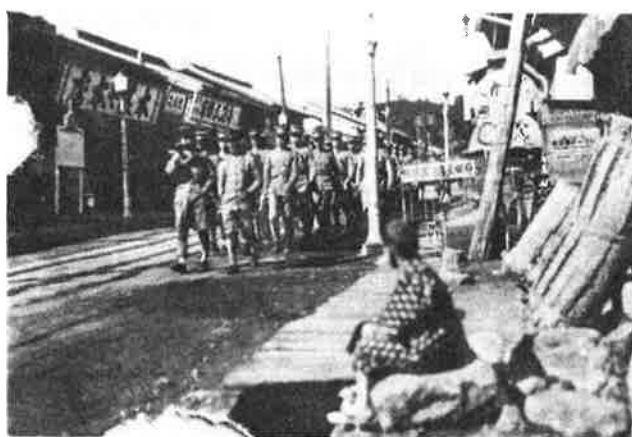
校庭で飛行機の見学と説明会
(昭和2年11月21日)



校友会誌創刊号
(昭和2年12月)



近県中等学校庭球大会に優勝
(昭和4年5月19日)



町内風景

	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
昭和 5 年	4. 6 創立10周年記念式典を挙げる 図画習字展覧会を一般公開 7.20 同窓会主催海外発展移民講習会開く 10.12 県下中学校連合競技大会において競技部 3連勝をかざる 10.30 教育勅語頒布40年記念式 11. 1 10周年記念大運動会を行なう	1.11 大正橋落成式 5. 3 群馬県純潔同盟結成 7.11 小作争議各地でおこる 7.18 各地で教員給料不払い 9.19 公立学校職員服務規定 施行 11.29 群馬会館落成	4.22 ロンドン海軍軍縮会議 条約調印 9.10 米価暴落 9.25 生糸大暴落 10. 1 東京神戸間に特急運転 開始 11.14 浜口首相東京駅で狙撃 される
昭和 6 年	4. 1 この年より作業科を新設園芸木工を課す る 6.17 校内籠球大会行なわれる。籠球部再興す る 8. 4 有志により旅行部を結成 三国峠草津白 根方面に旅行 9.24 県下中学校連合大会で剣道部優勝する	3. 7 方面委員総会 6 谷川岳開山する 7.10 思想問題講習会開かる 9. 1 上越線全線開通 10. 4 第一回桐工主催近県中 等学校競技大会	3.25 国際失業反対デー 5. 1 大阪帝国大学開校式 6. 1 官吏減俸実施 9.18 満州事変勃発 12.17 内務省失業者42万人 と発表
昭和 7 年	9.23 県下中等学校連合武道大会において柔道 剣道とも2位 10.16 全関東中等学校庭球大会において佐藤平 方組優勝	2.11 前橋公園で建国祭挙行 2.15 15聯隊満州上海に出動 7.12 純潔思想について通達 11.12 佐藤次郎氏帰郷歓迎会 12.28 楽泉園設立	1.28 第1次上海事変 3. 1 満州国建国宣言 3.22 教員大量検挙 5.15 陸海軍将校犬養首相を 射殺
昭和 8 年	9.10 県下中等学校庭球大会において佐藤シン グルの部で優勝 10. 7 学芸会教科に関する研究発表形式によっ て行なう 10. 8 水戸高校主催全国中等学校剣道大会にお いて優勝 10.15 皇大神宮造営を決定する 10.29 明治神宮体育大会において庭球シング ルの部で佐藤選手優勝	7. 4 武装移民500名渡満 7.22 国防義会生れる 7.27 烏井峠開通式 9.10 赤化教員に結審 10.11 強戸村で地主と小作と の和解 大衆党は解散 11.12 製糸組合3ヶ月操業休 止を決定	1.30 独にヒトラー内閣成立 2. 4 長野県下赤化教員検挙 3.27 国際聯盟脱退の詔勅頒 発 5.26 滝川事件おこる 10.14 独国際連盟脱退を宣言 11. 8 蚕糸恐慌化 12.23 皇太子誕生
昭和 9 年	4. 1 4年生より第1種第2種の課程を設ける 4. 8 在校生と卒業生との第1回対抗競技大会 行なわれる 4.15 同窓会評議会佐藤次郎胸像建設案が決 まる 8.10 県下中等学校陸上競技大会で優勝 11.17 45年生高崎練兵場で御親閲拝受 12.22 皇大神宮鎮座祭挙行	4. 4 公立学校教員制服規程 きまる 5.10 佐藤次郎郷土葬 8. 5 第1回佐藤次郎杯大会 9. 1 浅野カーリット操業 9.10 県武徳殿落成式 10. 6 八高線開通祝賀会 11.17 陸軍大演習	4. 3 教員精神作興大会二重 橋前で催される 4.25 思想検事を設置 6. 1 文部省に思想局を設置 10 中国共産党西遷を開始 11.20 内務省身売り防止策を 通達 12. 1 丹那トンネル開通式
昭和 10 年	2. 2 全校野外教練を行なう 3.24 図画教室増築なる 7.24 佐藤選手胸像除幕式を行なう 9.29 明治神宮予選庭球大会において優勝 10.20 推肥舎を構築する 10.30 徳目週間を設定する	2.16 第1回国民精神文化講 習会 6. 1 渋川中之条間バス開通 7.21 県庁土曜半日を中止 9.25 県下大水害	4. 1 青年学校令公布 4. 7 美濃部達吉不敬罪で告 発される 8. 3 国体の明徴に関する政 府声明

(裏)



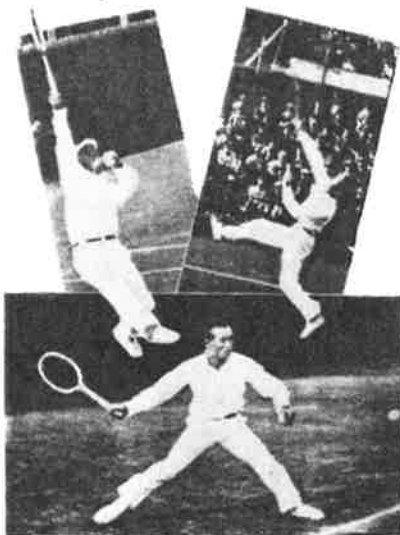
(表)



十周年記念文鎮



第7回明治神宮体育大会庭球シングルス優勝記念
(昭和8年10月)



佐藤次郎選手
(昭和7.8年頃)



上草履問題
(昭和8年)



渋川郵便局(昭和5年頃)



陸軍大演習
(昭和9年相馬ヶ原)



校内に皇大神宮建立
(昭和9年)

	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
昭和 11年	3. 6 本校舎補強工事完了する 4.21 県下中学校青年団対抗駅伝競争に参加 7.20 全校一斉に野外教練を行なう 9.18 防空演を行なう 10.13 勤儉週間を設け全校節約につとめる 11. 1 県下中等学校武道大会において優勝	3.19 東国敬神道場落成式 4. 7 上越線大穴駅新設 4.12 東国聖業奉讃大会 4.28 啓明会生れる 6.20 小学生 少年団を結成 9.17 群馬県防空大演習	2. 9 三菱木炭自動車を製造開始 2.26 2.26事件 翌日戒厳令 布告 8. 5 内務省小作争議最高と 発表
昭和 12年	1.18 渋中師道5則を制定する 6. 4 校内に「発音」研究会を発足させる 6.11 毎月15日を健康相談日として、本月より 実施 8. 9 日中事変恤兵資金、出征将兵慰問 遺家 族慰問資金について提出する 8.15 同窓生の応召者弔慰金の支出について具 体的に規定する 10.18 国民精神総動員に関する本校実施要項を 発表 12.11 南京戦勝祝賀行列に参加	2. 2 今年の入試身体検査に 重点をおくことに決定 2.27 電気水練(大同製鋼の 前身)操業 4.23 教育会館落成式 10. 8 第一回国民精神総動員 委員会もたれる 11.10 国民精神作興週間 12.8 海事思想普及のため、 各地で講演会	3.30 文部省「国体の本義」 出版 7. 7 日中戦争起る 7.21 文部省に教学局を設置 8. 9 第2次上海事変 9.10 戦時経済体制へ移行 戦時統制3法公布 11. 4 戦艦大和起工 12.10 教育審議会官制公布 12.22 日本労働組合評議会に 解散命令
昭和 13年	4. 6 相撲部を新設する 岩崎先生応召 4.21 職員生徒の安全により奉安庫を校長室 に安置する 9. 8 平瀬先生出征 職員生徒歓送 9.13 時局の心構えについて文部大臣の放送あ り 9.21 北部体育大会行なわれる 10. 3 第1回校内相撲大会を行なう 10.29 県下中等学校相撲競技大会において相撲 部優勝	2.15 時局対策協議会生れる 5.23 教員精神作興大会 6.10 支那時文講習会 7. 8 制服新調、皮靴の調製 の禁止通達 9. 1 関東電化設立 9.15 「群馬若鷺の会」を組 織 本校出身2名 10. 7 「国体の本義」に関す る講習会	4. 1 国家総動員法公布 5.24 文相 学生の勤労作業 実施を通達 7.30 産業報国連盟創立 8.24 学校卒業生使用制限令 公布施行 11. 7 国民精神作興週間始ま る
昭和 14年	2.20 高橋五一君宅より御下賜金の2000円の 寄贈あり 高橋五一賞設置を決定する 6. 1 本校非常時教育施設要項を決める 7.25 渋中特設防護団を設け団則を制定する 7.26 赤城裏修練農場に45年生勤労奉仕 9. 4 山野横断競走に参加	2. 8 県自校体操設定を通達 3 入試に筆記試験を緩和 4. 1 高崎工業設立 5. 8 学校印刷共同委員会 9. 3 中学校山野横断競争 12.28 上毛精機設立	4. 1 青年学校義務制となる 名古屋帝国大学開校 5.11 モノハン事件おこる 9. 1 興亜奉公日制定 10.20 物価統制令実施 12.25 石油木炭配給制となる
昭和 15年	2. 1 父兄後援会校舎増築のために生まれる 3.31 告示160号により15学級定員750 名となる 4.13 校旗の旗手旗護を任命する 5.13 護国神社設立のため勤労奉仕 5.30 戦闘帽体操作業の時間用いることに決定 6. 2 2600年奉祝武道大会において優勝 9.13 校舎増築の地鎮祭 11.30 校友会費30銭に値上げ 12.26 本館東側2階建4教室 西側1教室増築 落成式 祝賀会を行なう	5. 1 渋川町代用食を強調 5. 1 相生高工に電機科増設 5. 5 米蚕戦線へ中等学生5 000名動員 6.13 前橋渋川間舗装始む 6.22 中等教育刷新講習会 10. 7 中等学校滑空訓練の講 習会 11.10 紀元2600年記念式	4. 8 国民体力法公布 4.22 米みそ砂糖マッチ木炭 など切符制となる 8. 1 基本国策要綱を発表 9.27 日独伊3国同盟成立 10.12 大政翼賛会発会式 11. 2 大日本帝国国民服令公 布即日実施 11.23 紀元2600年式典 皇居前で挙行



修学旅行案内書



土俵で対決
(昭和13年4月)



高橋賞の寄贈



戦没者 慰 霊 祭



相撲部優勝を飾る
(昭和13年10月29日)



地鎮祭(東校舎増築)

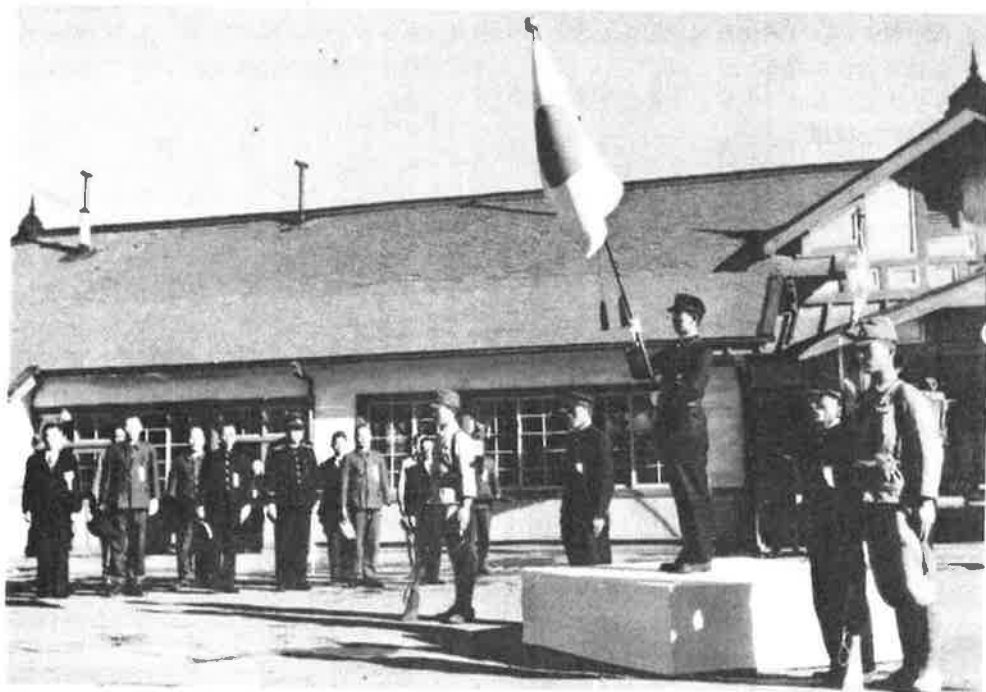
	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
昭和 16年	4.10 高見校長退職され 長岡禎利氏着任 この年滑空部結成される 4.29 校友会を改組して学徒団を結成 結団式 5.20 4 5 年生 1 泊で四万へ往復行軍 7.15 学校報国農場うまれ 鋤入式 8. 7 六合村 草津にある根廻し竹を採集する 9. 1 校庭西南に炭焼きがまをつくり製炭 12.22 戦勝祈願をかね 護国神社往復 12.27 非常召集訓練を行なう	4.15 群馬郡青少年団発足 7. 1 中学校の制服を国防色 に統一する指示 7.13 県外の遠征試合禁止 11. 2 各校に思想指導責任者 を配置 11. 8 県下学徒団 1 0 0 キロ 行軍 1 2 0 0 名参加 12. 1 群馬銀行渋川支店設置	1. 8 陸軍戦陣訓を発表 1.16 大日本青少年団結成 4.13 日ソ中立条約成立 6.22 独ソ戦争おこる 8.14 大西洋大憲章発表 10.18 東条内閣成立 11. 1 大学専門学校修業年限 6 ヶ月短縮 12. 8 太平洋戦争勃発
昭和 17年	2.14 文部省総合学事視察本校で行なわれる 4.18 昼夜とも空襲警報発令 夜は舎生交替で 警備にあたる 4.24 挺身隊員を発表 5.18 増産のため 校庭斜面に大豆等をまく 9.18 グライダ―渋中 1 号を購入 11.27 体力章検定を実施 12. 4 武装行軍競争選手練習を始める 12.12 にんじん ごぼうなどを堀る	4. 8 大日本体育会群馬支部 発足 4.18 初めての空襲警報発令 7.15 渋川図書館設立 7.22 暑中休暇 5 日間短縮 8.25 女子校 3 年以上英語科 は随意科と決定 9. 1 群馬県学徒訓練会成立 10. 満蒙少年義勇軍結成	2. 1 衣料切符制実施 3. 5 文部省中学校の数学理 科の要目改正 4.18 米空軍本土初空襲 5.20 翼賛政治会創立 7. 8 女学校の英語随意科目 となる 8.21 閣議で中学の学年は 4 年に短縮を決定
昭和 18年	1.15 明治神宮氷上大会開催に先立ち 本校生 徒氷上奉仕 4. 1 渋川中学校後援会会則なる 4. 7 小林熊光氏新校長として着任 6.30 金ボタンの回収を強力にすゝめる 7.20 校内に海洋班を設置 班員 1 3 4 名 7.29 5 年 3 年生防空壕掘り 9.13 佐藤次郎胸像 戦時物資として供出 11.14 学校防空計画を樹立	3.14 群馬郡航空少年隊結成 3.29 渋川通学訓練会懇談会 3.31 前橋医学専門学校設立 商業学校は商工学校に 転換 6.22 渋川聖戦完遂懇談会 7.21 中等学校校長教頭学内 宿泊訓練 9.23 渋川町内総合防空演習	1.21 中等学校令公布 6.25 学徒戦時動員確立要綱 決定 7.30 女子学徒動員決定 10.12 戦時非常措置方策決定 12. 1 第 1 回学徒兵入隊 12.21 都市疎開実施要綱を發 表
昭和 19年	4.20 堤岡航空場勤労奉仕作業開始 6.19 テーブル掛 万国旗など非急物資として 供出 7.15 尾島 電化 カーリットへ奉仕隊出動 10.15 健民修練開所式 一東教室 11. 1 ラッパ吹矢など不急品供出	1.15 渋川忠霊塔敷地地鎮祭 3.18 通学訓練細目きまる 5.23 渋川増産増進協力会 発足 9.10 疎开学童後援会結成 9.14 防空救護協議会発足	7. 8 学童疎開実施要綱発表 8.31 学徒勤労令公布 10.18 満18才以上兵役に編入 10.24 レイテ沖海戦 12. 1 中等学校の卒業延期
昭和 20年	3.10 本校14教室を学校工場として使用 4.23 決戦訓について生徒に訓示 6. 8 通年動員学徒 学校工場受入式 7.23 陸軍通信事務援助のため 国民学校へ行 く 8.30 生徒訓発表 9.17 生徒週番制度復活実施 11.20 武器接収のため 外人部隊来校 11.24 ドングリを家庭において採集させる 12.15 食糧難と交通事情のため 1 月 2 4 日まで 臨時休校	6. 2 青葉部隊渋小に駐留 8. 1 長野原線開通 9. 4 青葉部隊復員式 9.30 渋川製作所創立 10. 3 柔剣道廃止の通達 10.13 中等学生援農のため勤 労奉仕 10.14 米軍渋小に進駐 12.15 1 月15日まで学生定期 券の使用禁止	3.18 全学校授業停止 5.25 米空軍東京を空襲 8. 6 広島に原子爆弾投下 8.15 終戦の詔勅放送 10.11 G H Q 5 大改革を指令 12.11 財閥解体を指令 12.17 衆議員選挙法公布 12.31 G H Q 修身地理日本史 の授業停止を指令



勤労奉仕赤城山麓へ
(昭和17年)



第13回明治神宮国民錬成大会
榛名湖整美作業
(昭和18年1月)



駅頭に聖恩旗を迎える(昭和18年1月)



予科練案内書
(昭和19年4月)



軍需工場に学校
報国隊として生徒出動
(昭和20年7月)



戦争の終結を
報ずる新聞
(昭和20年8月15日)

	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
昭和 21年	4.16 生徒クラス自治委員選挙 5. 9 寮においても自治制となり寮長副寮長を 選挙する 6.18 通学班を編成し名簿を作る 7.28 第1回北毛地区体育大会 9.19 野球部復活 対外試合盛んとなる 10.15 不要図書1人800冊納入して 教科書 用紙に代える 11. 2 新憲法頒布記念式を挙行	1.26 渋川土木出張所開庁式 3. 6 群馬郡教員組合結成 4.15 渋川文化連盟生れる 5. 2 渋川地区中学校教員組 合結成式 5. 7 群馬県適格審査規定公 布 6. 9 渋川行政懇談会生れる 8.10 吉野組製糸創立	1. 1 天皇人間宣言 1. 4 G H Q軍国主義者の公 職追放を指令 4. 7 米教育使節団報告書発 表 5. 3 極東裁判始まる 12.30 文部省633教育体制 を発表
昭和 22年	3.23 新学制について父兄会 5. 6 進駐軍将校本校視察 5.21 禁止教科書 古教科書回収して集荷する 5.26 雄弁部主催 賀川豊彦氏講演会 7.26 高原学校に参加 9.15 午後大水害がおこる。翌日授業中止 24日から水害復旧に勤労奉仕 10. 1 社会科グループ研究活動盛んとなる 12. 5 全校自治会を開く 12. 8 学生大会において 学級の自由化 頭髪 の自由を決議	1.24 群馬県中等教員組合発 足 3.12 新学制の準備委員会を 設ける 4.29 新制中学校入学式 7.30 群馬県民生委員連盟結 成 9.12 キャサリン台風で被害 12 越冬資金闘争各地で活 発化	3.31 教育基本法 学校教育 法公布 4. 5 第1回知事市町村長選 挙 5. 3 日本国憲法施行 6. 8 日教組結成 9.11 社会科授業再開 9.16 インドネシア独立宣言 10.21 国家公務員法公布
昭和 23年	2. 1 P T A 発足する 3. 1 榛嶺再刊1号出版発行する 4.10 新制高校開校 4.25 新制高校開校祝賀会 新高校の起章パッ ジ ボタンを制定発表 5.24 5日制となる 10. 1 定時制第1回入学式 入学生58名 10.18 定時制授業開始する	4. 1 高崎水上間電化 高体 連 群馬高教組発足 5. 9 群馬郡青少年補導委員 創立 6.12 第一回高校体育大会 10. 6 国立渋川病院創立 11. 1 教育委員会発足	2.16 朝鮮民主主義人民共和 国樹立宣言 5. 5 ソ連からの引揚船入港 8.15 大韓民国樹立宣言 9.18 全学連結成される 10. 5 第1回教育委員選挙 11.12 極東軍事裁判判決下る
昭和 24年	3.14 新制高校第1回卒業式 5.20 第1回P T A 総会 6.30 映画教室を行なう シベリヤ物語 10.16 全定共催大運動会 文化部もそれぞれ展 示会を行なう 12. 3 定時制全校自治会 退職勧告を受けた荻 原、楠瀬先生の復職歎願書提出を決議 12. 5 学校長引率のもとに生徒代表、歎願書を 県教委へ提出 12. 7 P T A 前記二教諭の歎願書提出を決議 12.12 二教諭の離任式行なわれる	3.14 新制大学の入試開始 6.20 沼高水上分校設置 7.16 群馬大学第1回入学式 県教委 学校における 政治活動の禁止を通達 8.31 キティ台風各地に被害 9.20 新農地委員選挙 11. 3 第一回県文化祭	4. 4 北太平洋条約調印 6. 1 労働組合法など公布 7. 5 下山事件おこる 7.15 三鷹事件おこる 8.17 松川事件おこる 10.1 中華人民共和国成立 11.11 G H Q 顧問イーールズ氏 赤い教授追放を論ず
昭和 25年	4. 7 平野校長退職され 狩野道美校長就任 6.23 専任宿直職員配置される。番場氏 9.30 群馬県青少年演劇コンクールに 演劇部 出演 「息子」 10. 6 創立30周年記念祭 あわせて第1回文 化祭を行なう この日記念祝賀式 10.21 寄宿舎を改築し、図書室 集会室を作る 11.24 英語弁論大会を行なう	2.10 高校12学区制を制定 3.10 北群馬郡社会福祉協議 会結成 4.25 北群馬郡緑化促進委員 会発足 6.16 渋川家政女学校創立 8. 1 渋川保健所なる 9.15 日本精密測器創立	1.26 インド共和国発足 6.25 朝鮮戦争勃発 7. 8 マッカーサー警察予備 隊創設を指令 7.27 株式市場未曽有の盛況 9. 1 閣議でレッドパージを 決定する



ノート利用の学級日誌
(昭和21年11月)



クラス文集
(昭和23年3月)



定時制課程
開始さる
(昭和23年10月1日)



戦後まもない浜川中心街



校舎西側の杉並木
(昭和29年1月に伐採された)

	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
昭和 26年	4. 2 N H K 前橋支局にテレビ公開見学する 5.26 ピアノ購入披露音楽会 伊藤京子 田辺 みどり氏等出演 6.30 渋高新聞創刊号発刊される 7. 9 自治会会則原案を審議する 庭球部県大会に優勝 10. 5 応援歌発表会 10.23 校舎増築についての建築委員会発足 12. 3 競技部県下駅伝大会に優勝	1.18 高校入試7ヶ目に決定 3.31 群師桐生工専閉校 4.20 ふたば学園設置 5.22 高校新聞講習会 9.13 群馬法律専門学院開校 10. 6 川原湯温泉大火 11. 7 第1回高校柔道大会 11.11 第一回定時制芸能コン クール大会	2.13 地方公務員法公布 4. 1 米屋の民営復活 3.31 農業委員会法公布 5. 5 児童憲章宣言 7.10 朝鮮休戦会談開始 9. 1 民間放送始まる 9. 8 対日講和条約 日米安 全保障条約調印
昭和 27年	1.15 校歌制定記念大音楽会 柴田陸氏小林 福子氏等出演 1.24 自治会生徒会と改称 会則成立する 生徒会役員選挙 2. 4 週5日制の是非について世論調査 10.21 理科校舎地鎮祭 11.10 立太子奉祝記念式 12. 6 新校舎上棟式	4. 1 高崎線電化開通式 4.28 金島公民館発足 7.15 群馬県労働金庫発足 9. 1 長野原分校設置 11. 1 市町村教育委員会発足 11. 7 金古小学校全焼 12.22 前橋高校火災 関東製 鋼無期限ストに突入	5. 1 二重橋メーデー事件 6.25 新宿事件 吹田事件お こる 7.21 破防法公布施行 8. 1 保安庁新設 11.10 皇太子「立太子礼」お こなわれる
昭和 28年	4.10 全日制Ⅰ学級 定時制Ⅰ学級増となる 6日制に復帰 5. 9 新校舎落成記念式 8.31 生徒手帳を配布 9.19 定時制生徒会 通動会全定共催を拒否 この年より運動会文化祭は別々に開く 11.13 校内対抗競技大会始まる 11.19 終戦時学校の裏の農家に疎開させていた 書籍戻る	2.10 寄居町電車停留所廃止 6.11 三国峠の開通なる 6.24 妙義基地反対期成同盟 結成される 6.30 渋川高崎間電車廃止 7.28 群大に工業短大併設 8 卒業生わだつみ会結成 9.12 県立図書館開館	2. 1 N H K テレビ放送開始 3.23 中共から引揚船入港 8. 7 スト規制法案公布 8.28 民間テレビ放送始まる 10.30 池田ロバートソン会談 自衛力漸増で意見一致 12.25 奄美大島日本へ復帰
昭和 29年	2.21 県下高校対抗スケート大会で三連勝をか ざる 5. 1 前年度寄宿舎閉鎖 寄宿舎と食堂を柔道 場に改造を始める 5.31 運動場整地完了 テニスコート四面とな る 佐藤次郎胸像再建 6. 2 軟式野球部を廃止して硬式一本となる 6. 9 吹奏楽部新設のため 資金募集をかねて 音楽会を開く 11. 7 佐藤次郎胸像除幕式举行 11.13 渋川吾妻利根 三地区新聞部連絡協議会 発足	2.28 渋川前橋間電車廃止 3.16 高校入試に英語を追加 4. 1 渋川町市制を施行 渋川市南小学校開校 4. 1 学校図書館法 理科教 育振興法施行さる 9. 1 南橘村前橋市に縮入 9. 2 渋川市制記念式 祝賀をかねて祭礼 9.23 群大に医進コースを設 置	3. 1 ビキニ水爆実験で第五 福龍丸被災 3. 1 全国で35市生まれる 5.29 教員の政治活動を制限 する教育二法成立 7. 1 防衛庁 自衛隊発足 7.21 インドシナ休戦協定調 印 12.22 政府自衛隊合憲の統一 解釈を声明
昭和 30年	2.13 県下対抗スケート大会で四連勝 4.29 生徒会主催 旧5市一週自転車旅行 5.27 富士航空 本校の航空写真を撮影 6. 1 放送設備完成 放送始まる 6. 7 校舎ペンキの塗りかえ始まる 7. 1 定時制 S T ニュース1号を発行 9. 9 第1回北毛地区定時制体育大会行なわれ る	1.20 清里村前橋市に編入 3. 1 吾妻町発足 4. 1 群馬町 箕郷町発足 室田高校榛名高校とな る 9. 1 赤城村発足 12.25 長野原線デールカー に切りかえ	4.18 第1回アジアアフリカ 会議開かれる 7.24 砂川町基地反対を決議 8. 6 第1回原水爆禁止世界 大会 11.15 保守合同自民党となる



寄 宿 舎（済美寮昭和25年2月15日）



有志による学生新聞
（昭和26年7月）



校歌制定記念
（昭和27年1月15日）



老朽した生徒控所



定時制文芸部の
意欲的創刊号
（昭和26年10月25日）

	本 校 の 歩 み	県 内 の 歩 み	国 内 外 の 歩 み
昭和 31年	4.20 英語部誌 ARROW創刊 3.10 歌声運動盛ん 音楽部「おたまじゃくし」 発行 7.8 県高校柔道大会において優勝 11.21 同窓会東京支部総会 11.23 第1回渋川地区高校演劇連盟発表会 渋高「彦一ばなし」 12.4 体育館解体工事始まる 12.23 定時制北毛地区学芸大会 渋女で行なう	2.21 県教要各高校四学区制 実施 5.26 群大自治会教育二法反 対スト 6.1 音楽モデル県に指定 9.1 赤城村発足 10.1 新教育委員会法（任命 制）施行 12.28 渋川伊香保間電車廃止	5.21 売春防止法成立 6.2 新教育委員会法成立 7.26 ナセル大統領 スエズ 運河国有化を宣言 10.19 日ソ共同宣言団交回復 10.23 ハンガリー動乱おこる 12.18 日本の国連加盟を国連 総会可決
昭和 32年	2.16 北毛地区生徒会連合会行なわれる 4.9 新校旗制定 樹立式 5.10 新聞部委員会制となる 7.16 体育館落成式行なわれる 11.2 山県理博講演会「放射能の人体に及ぼす 影響について」 11.6 渋高赤十字支部結成式 11.13 定時制10周年教育研修会	1.26 ジラード事件おこる 2.1 高崎経済大学設置 3.11 県立博物館開館 3.3 榛東村発足 5 前橋赤城大洞間直通バ ス開通 8.1 渋川中央公民館開館	5.15 建国記念日制定法案 衆議院可決 8.13 文部省勤評実施を通達 8.17 原子の火 初めて原子 力発電所にとめる 10.4 ソ連世界最初の人工衛 生打上げに成功
昭和 33年	1.1 生徒会主催の水沢山初登山 2.19 スキー教室この年から年中行事化する 3.13 講堂改装始まる 3.31 狩野校長退職され井関保氏校長に補せら れる 6.8 生徒会主催自転車旅行 9.11 北小プールにおいて水泳教室	4.1 渋川市立工高開校 5.7 榛名高原学校開校 6.9 米軍相馬ヶ原演習地返 還 6.20 渋川伊香保間有料道路 開通 10.11 群馬化学創業	5.24 アジア競技大会東京で 開く 8.28 文部省 小中学校に道 徳教育を義務化する 9.15 日教組総評の勤評全国 闘争
昭和 34年	2.15 北毛地区高校親善柔道大会 4.20 第40回開校記念日 マラソン大会 9.23 全国高等学校学力テスト行なわれる 11.1 2日間にわたり11月祭行なわれる 11.6 竹山道雄氏 講演会	2.24 勤評反対行政処分 4.1 相馬ヶ原自衛隊発足 6.8 高崎音楽センター着工 11.13 草軽電鉄廃止 11.9 嬬恋線建設始まる	4.10 皇太子結婚式 4.15 安保改定阻止1次統一 行動 5.1 防衛2法案を可決 9.26 伊勢湾台風
昭和 35年	2.13 第1回渋川地区三校生徒会役員協議会 5.14 日本体操祭 体育館で行なう 5.7 谷川徹三氏 講演会 10.5 能楽教室を催す 11.7 小池校長着任される	1.10 安保阻止県民大会 4.1 学校安全会発足 9.1 子持村発足 10.18 県対ガン協会発足	6.10 ハガチー事件 6.15 全学連国会内に乱入 6.19 新安保条約自然承認 9.10 カラーテレビ放映開始 10.12 浅沼稻次郎刺殺される
昭和 36年	5.11 講堂増改築上棟式を行なう 7.21 講堂増改築落成する 11.10 創立40周年記念式 あわせて増改築落 成式を行なう 11.23 音楽教室移転 記念音楽会を催す 12.4 旧宿直室竣工する	1.6 八幡宮県文化財に指定 1.10 県スポーツセンター開 館 3.27 豊秋中学校開校 6.12 上越線複線化起工式 6.30 定時制ミルク給食開始	6.21 池田ケネディ会談 7.21 米人間衛星船打上げ に成功 8.13 東独東西ベルリン封鎖 10.26 文部省中学校一斉学力 テストを強行
昭和 37年	2.12 高校スケート大会において優勝する 3.31 北 西 西南の門をとりつける 4.1 一学級増 定員900名となる 5.18 急増対策のため 校舎増築委員会発足 8.28 急増対策のための 増築起工式	4.1 群馬工専開校 4.14 農大二高開校 4.25 渋川北中学校開校 4.28 自衛隊12師団創立 10.25 榛名有料道路開通	7.10 米国初の通信衛星打上 げに成功 7.11 創価学会参議院で「公 明党」結成 1.9 LT貿易始まる
昭和 38年	4.1 一学級増 定員1050名となる 4.25 鉄筋コンクリート3階建6教室竣工	3.23 教育センター開所式 4.1 中央高校 藤岡立高校	1.7 中ソ論争表面化 2.5 日ソ貿易協定に調印



水沢山元旦登頂



伊香保より渋川ゆき電車
(昭和31年12月)



創立40周年 (36年)



生徒会主催サイクリング
(昭和33年6月)



30年代の校舎前景

	本校の歩み	県内の歩み	国内外の歩み
昭和38年	7.26 定時制E T A結成される 9.27 生物部の研究「平沢川の動物」日本学生科学賞群馬県審査で優秀賞を得る 11.16 第1回能研テスト行なわれる	など開校' 4. 1 渋市工に定時制設置 5.30 渋川市民体育館落成 9.30 勤労福祉会館完成	1.10 教科書無償法案成立 8.14 核実験停止条約に調印 11.22 ケネディ大統領暗殺される
昭和39年	5. 1 渋川地区新聞連盟協議会もたれる 10. 1 三校合同写真展覧会始めて行なわれる 10. 3 赤城北地区懇談会 この年各地で実施 10.24 音楽教室講堂南側へ移転 12.27 サッカー部創設	3.30 原研高崎研究所開所 6.20 北毛地区教育懇談会生れる 6.27 赤城有料道路着工 11. 7 草津料道路開通	10. 1 東海道新幹線営業開始 10.10 東京オリンピック開催 11.12 米原潜 佐世保に寄港 11.17 公明党結成大会開く
昭和40年	2.24 生徒会主催で集団献血を行なう 3. 1 E T Aニュース1号発行 3.31 小池校長退職され 竹園一氏校長となる 5. 9 同窓会主催物故職員 合同慰霊祭を行う 7. 2 第一回三校合同美術展もたれる 10.27 図書館主催講演会 この年から盛ん	2. 5 松本事件おこる 4.13 高経大委託生問題で紛争おこる 4.19 長野原線電化起工式 7. 8 群大生徒処分で紛争 8.17 志賀草津高原道路開通	5.17 I L O 8 7 号条約承認 7.27 政府国債発行を決定 11.18 新国際空港を千葉県富里村に決定 12.18 日韓条約批准書交換式
昭和41年	3.31 増築工事第一期分なる 5.20 第一回県高校総合体育大会行なわれる 5.29 J R C その奉仕活動の功労により表彰される 9.19 職員会議で下駄ばきの要求否決される 12. 5 村松喬氏講演会	2. 1 三原田小焼ける 4. 1 渋川新市庁舎完成 9.27 高崎水上間複線化 10.5 金精峠開通式 11.13 渋川自動電話にかわる	1.18 早大授業料反対スト 2. 4 全日空機羽田沖に墜落 10.21 ベトナム侵略反対の統一スト 10.27 中国核ミサイル実験に成功
昭和42年	5.20 校舎第二期工事竣工する 6.28 スポーツテスト始まる 9.18 運動部室建築なる 11.11 定時制20周年記念 渋川地区定時制高校合同文化祭行なわれる 12.13 H.R交流促進委員会結成される	1. 1 沼田バイパス開通 3.17 高校入試5ヶ目となる 7. 1 長野原線電化なる 10. 1 新清水トンネル 水上有料道路完成	2.11 初めての建国記念日 6. 5 中近東戦争始まる 6.17 中国初めての水爆実験に成功と発表 8. 1 沖縄問題懇談会発足
昭和43年	2.15 同窓会会則変更について説明会 3.10 44総体の柔道強化指定校となる 4. 1 定時制一学級減となる 5.12 柔道場びらき行なわれる 5.12 創立50周年記念行事第一回準備会 7.20 部室移動について反対のビラ配られる 8. 3 寄宿舍取りこわし終る 図書館移転	2. 1 定時制教育振興会発足 5. 9 県公害対策委員会発足 7. 9 渋川で工場廃液のため水田枯れる 9.22 伊香保リンク完成 12.27 関越道渋川東松山間の計画決定	5.10 米と北ベトナムとのパ リ会談始まる 6.15 反代々木系学生 安田講堂へ乱入 7. 1 郵便番号制度発足 12.29 坂田 加藤会談 東大などの入試中止を決定
昭和44年	2.20 コンクリート校舎取りこわし始まる 3.31 増築第四期工事終る 飯塚新校長となる 10. 6 校庭整地なり 植樹工事始まる 11. 9 榛嶺祭に私服警官本校生徒に対し 職務質問 所持品検査を行なう 11.12 警官立ち入り抗議のビラ有志により配布 11.22 警官立ち入り問題処理委員会発足	2.15 群大自治会学生会部占拠 8. 7 渋川市の大気汚染調査 9.21 北毛反戦集会 反戦高協動き出す 10.26 伊勢崎高工学校封鎖 12. 1 前橋地裁 東邦亜鉛を起訴	5.26 東名高速道路開通 7.20 アポロ11号月面着陸 8. 3 大学臨時措置法案可決 10.10 反安保闘争拡がる 11. 1 文部省高校生の政治活動の禁止を発表
昭和45年	1.29 確約書 抗議文に関する生徒と学校との合意なる 3. 6 卒業式の最中一部生徒式を妨害 3. 8 生徒退学処分に抗議して 反戦高協 アナーキスト部隊 アジ行動続く	2. 8 群大寮に仮処分執行 4. 1 定時制3校を閉鎖 7.12 日米高校レスリング大会市民体育館で行なう 8.21 渋川幼児の公害検診	1.12 中教審大学への改革案を公表 3.15 万国博覧会開幕 3.31 赤軍派日航機を乗取り 66.22 安保条約自動延長

文責 校史編集委員会



合同慰霊祭
(昭和40年 5月9日)



新校舎地鎮祭
(昭和40年 8月19日)



H.R交流をかゝげる学級新聞
(昭和42年)



定時制三校合同文化祭
(昭和42年11月)



コンクリート校舎の解体
(昭和44年 2月)



開校記念マラソン
(昭和44年 4月)

学 校 現 況

指 導 方 針

1. 教 育 方 針

教育基本法、学校教育法に示された事項並びに精神に基き、平和的・民主的・文化的社会の形成者として有能にして心身ともに健全なる国民の育成を目指す。

2. 教 育 目 標

- (1) 道義心を啓培し、豊かな教養に根ざした均衡のとれた判断力と、たくましい実践力を養う。
- (2) 理解と愛情をもって自律的集団生活を営むことのできる能力を養う。
- (3) 積極的、自発的な学習態度の確立につとめ、深く豊かな知性を養う。
- (4) スポーツを奨励し、健康の増進を図り、明朗、健全な心身を養う。
- (5) 気品高き校風の培養につとめ、洗練された情操を養う。

3. 本年度の努力目標

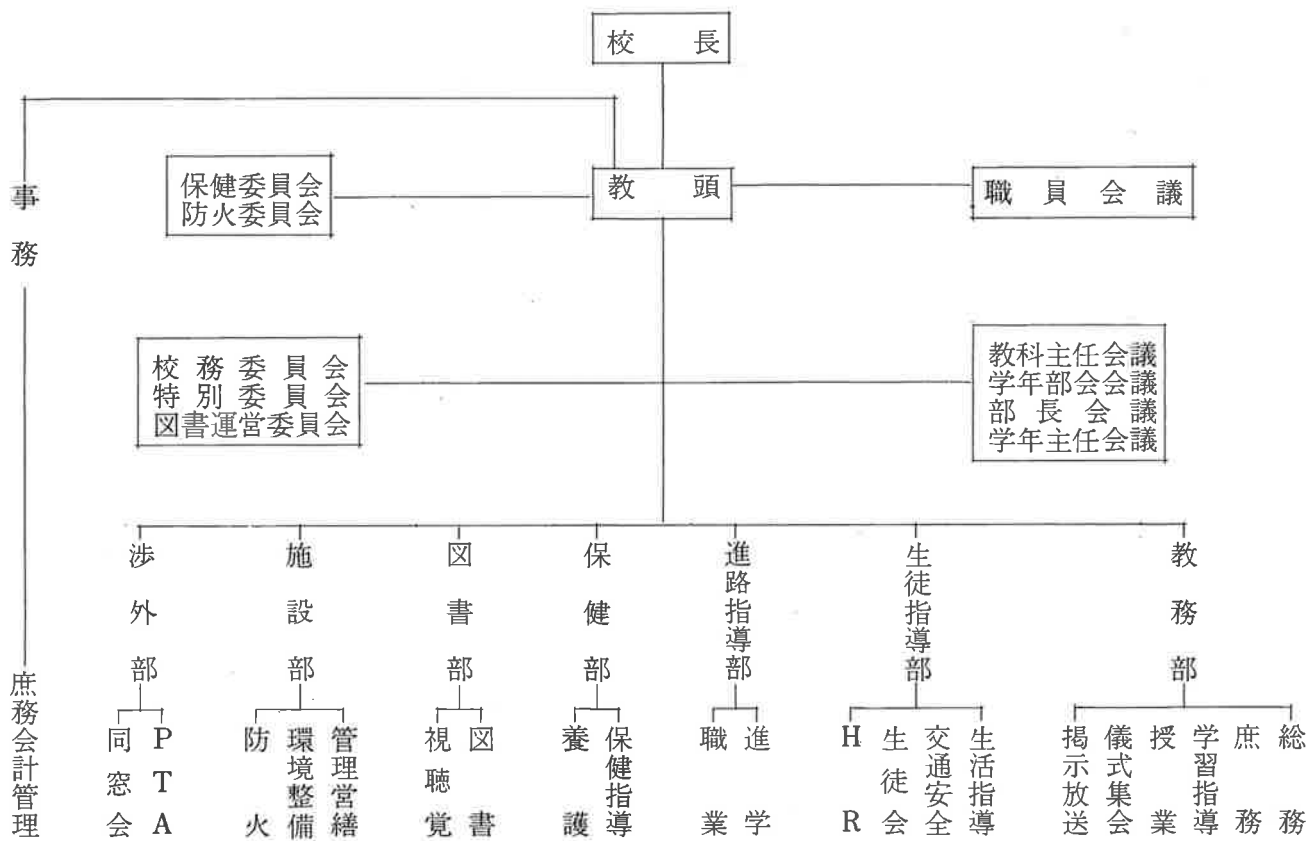
- (1) 教職員の志気の高揚と研修の推進
- (2) 教科、HR、学校行事等の充実と学力の増進
- (3) 生徒指導と進路指導の充実強化
- (4) 学習環境の整美
- (5) 創立50周年記念事業の推進

教 職 員 構 成

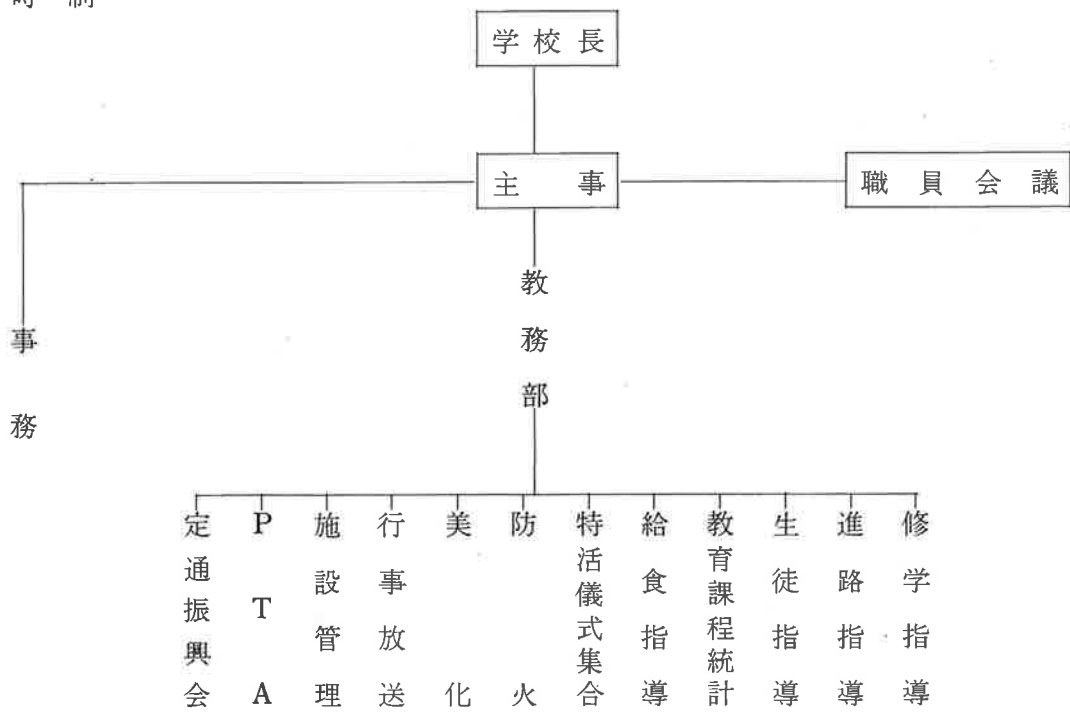
区 分		校 長						事 務 職 員	学 校 司 書 補	実 習 助 手	公 仕	合 計	非常勤 講師 兼務 時間	校 医	薬 剤 師	警 備 員	備 考
			一 般	科 別	実 習	養 護	計										
全 日 制	定 員	1	44			1	46	4	1	1	2	54	12	4	1	1	置籍 1
	現 員	1	44			1	46	4	1	1	2	54	兼務12	4	1	1	
定 時 制	定 員		7				7	1				8	17				
	現 員	兼務	7			兼務	7	1			兼務	8	非講 4 兼務13	兼務	兼務		

校 務 分 掌

●全 日 制



●定時制



教 育 課 程

(全 日 制)

(定 時 制)

教 科	科 目	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	4 年	計
国 語	現 代 国 語	3	2	3	8	3	2	3	2	10
	古 典 乙 I	3	3		6	1	2	2	2	7
	古 典 乙 II			2(4)	2・6					
社 会	倫 理 社 会		2		2					
	政 治 経 済			2	2					
	日 本 史			4	4			4	4	8
	世 界 史 A						4			4
	地 理 A					4				4
	世 界 史 B		4		4					
	地 理 B	4			4					
数 学	数 学 I	6			6	4	3			7
	数 学 II A							3	4	7
	数 学 II B		5		5					
	数 学 III			3(4)	3・7					
理 科	物 理 A								4	4
	化 学 A						4	4		8
	物 理 B		3	2	5					
	化 学 B		2	3	5					
	生 物	4			4					
	地 学	2			2	2				2
保 体	体 育	3	3	3	9	3	2	2	2	9
	保 健		1	1	2			1	1	2
芸 術	音 楽 I	(2)	(2)							
	音 楽 II		(2)							
	美 術 I	(2)			4		2			2
	美 術 II		(2)							
	書 道 I					2				2
外 国 語	英 語 A					3	3	3	3	12
	英 語 B	6	6	6	18					
特 活	L・H・R	1	1	1	3	1	1	1	1	4
	ク ラ ブ 活 動					1	1	1	1	4
計		34	34	34	102	24	24	24	24	96

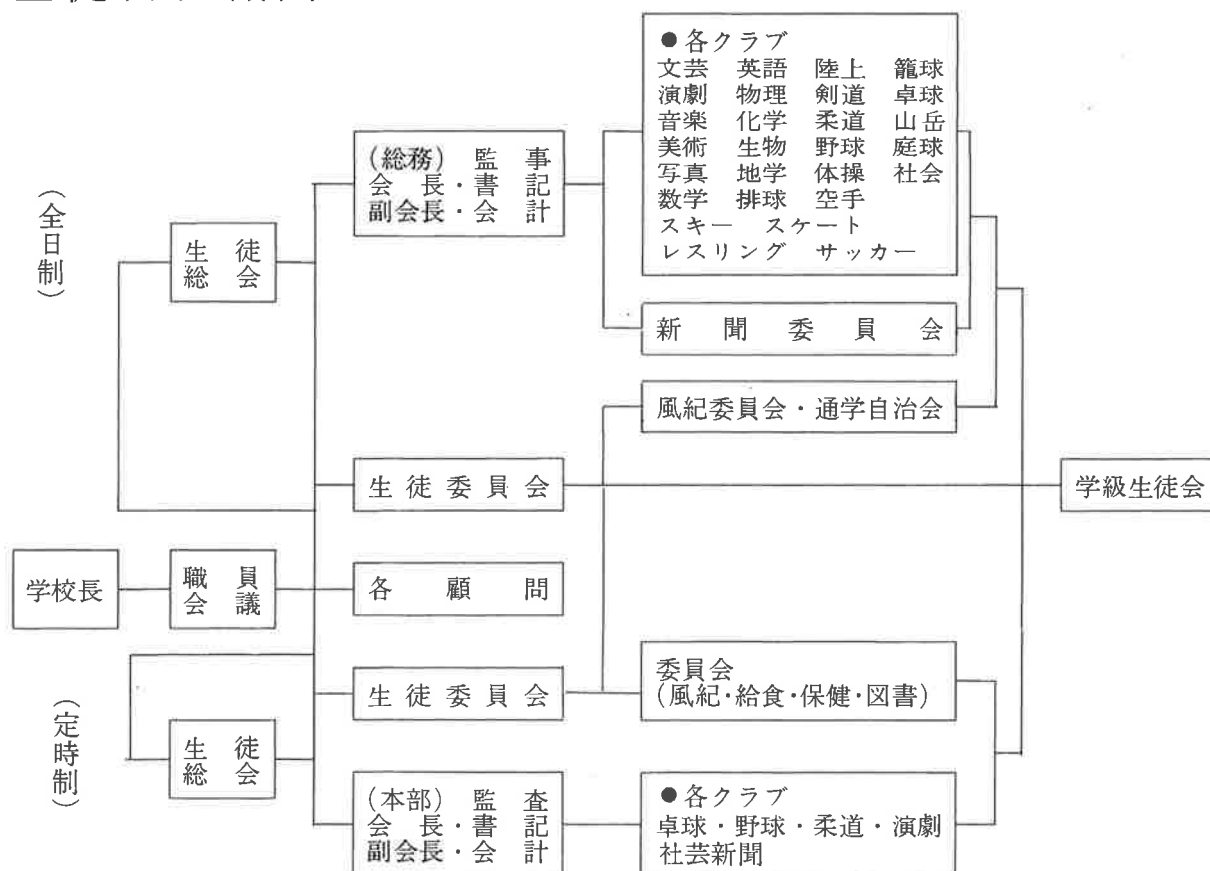
出身市町村別生徒数

	渋川市	伊香保町	子持村	小野上村	吉岡村	榛東村	赤城村	北橘村	富士見村	中之条町	長野原町	東村	吾妻町	草津町	嬭恋村	箕郷町	群馬町	前橋市	その他	計
全	305	22	39	17	45	24	37	18	16	112	25	14	75	17	30	47	45	93	17	998
定	28	6	12	1	2	6	4	9	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	72
計	333	28	51	18	47	30	41	27	16	112	25	18	75	17	30	47	45	93	11	1,070

図書館蔵書構成 (昭和45年3月31日現在)

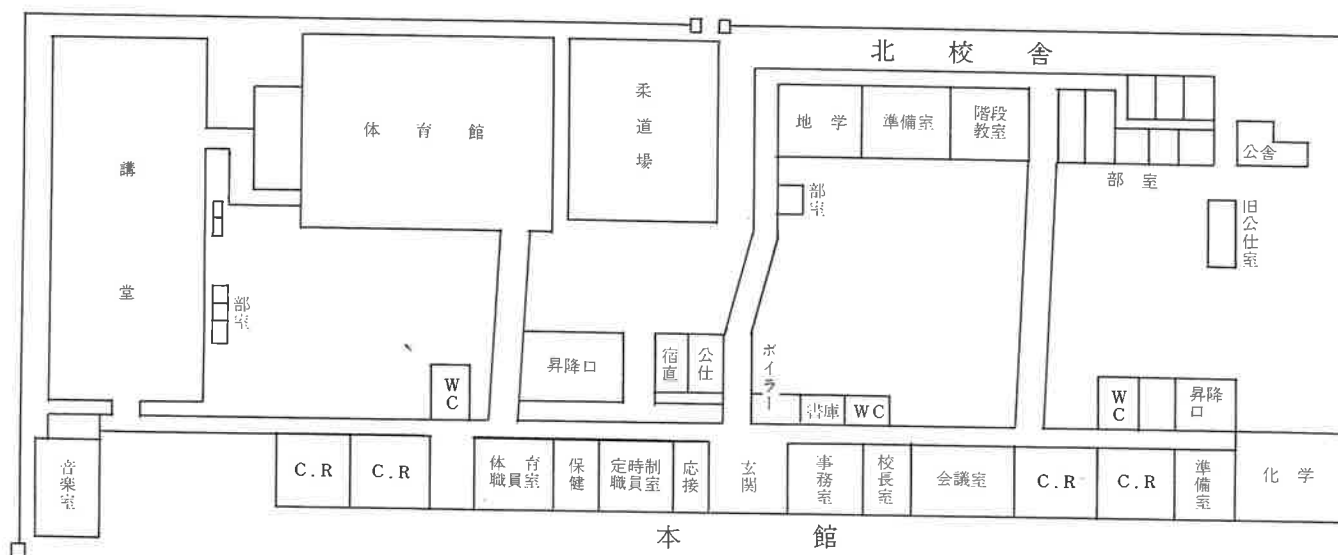
項目	分類	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	計
蔵書冊数		2,241	754	2,227	2,090	2,848	311	335	1,114	1,289	3,959	17,168
百分北		13%	4%	13%	12%	17%	2%	2%	6%	7%	24%	100%

生徒会組織図



校舎配置図

- (1) 校地面積 29,755 m²
- (2) 校舎面積 7,947 m²
- (3) 運動場敷地面積 16,000 m²

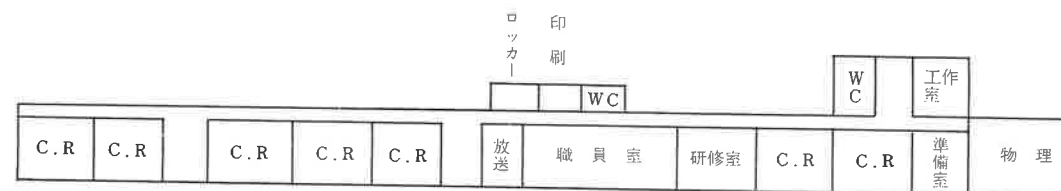


校舎内訳

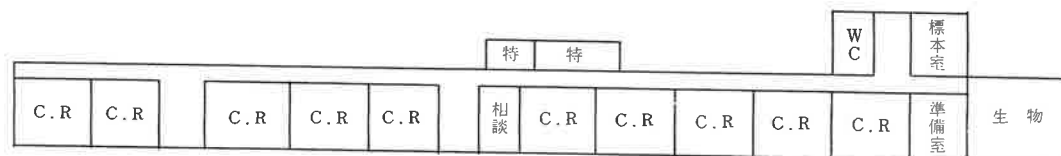
棟 別	区 分	棟数	面 積
北 校 舎		1	1,038 m^2
新 校 舎		1	4,559 m^2
体 育 館		1	715 m^2
柔 道 場		1	284 m^2
講 堂		1	850 m^2
音 楽 室		1	125 m^2
公 仕 室(旧)		1	27 m^2
物 置		1	12 m^2
運 動 部 室		3	84 m^2
渡り廊下その他		6	218 m^2
定時制クラブ室		1	15 m^2
購 売 室		1	20 m^2
計		19	7,947 m^2



北校舎二階



本館二階



本館三階

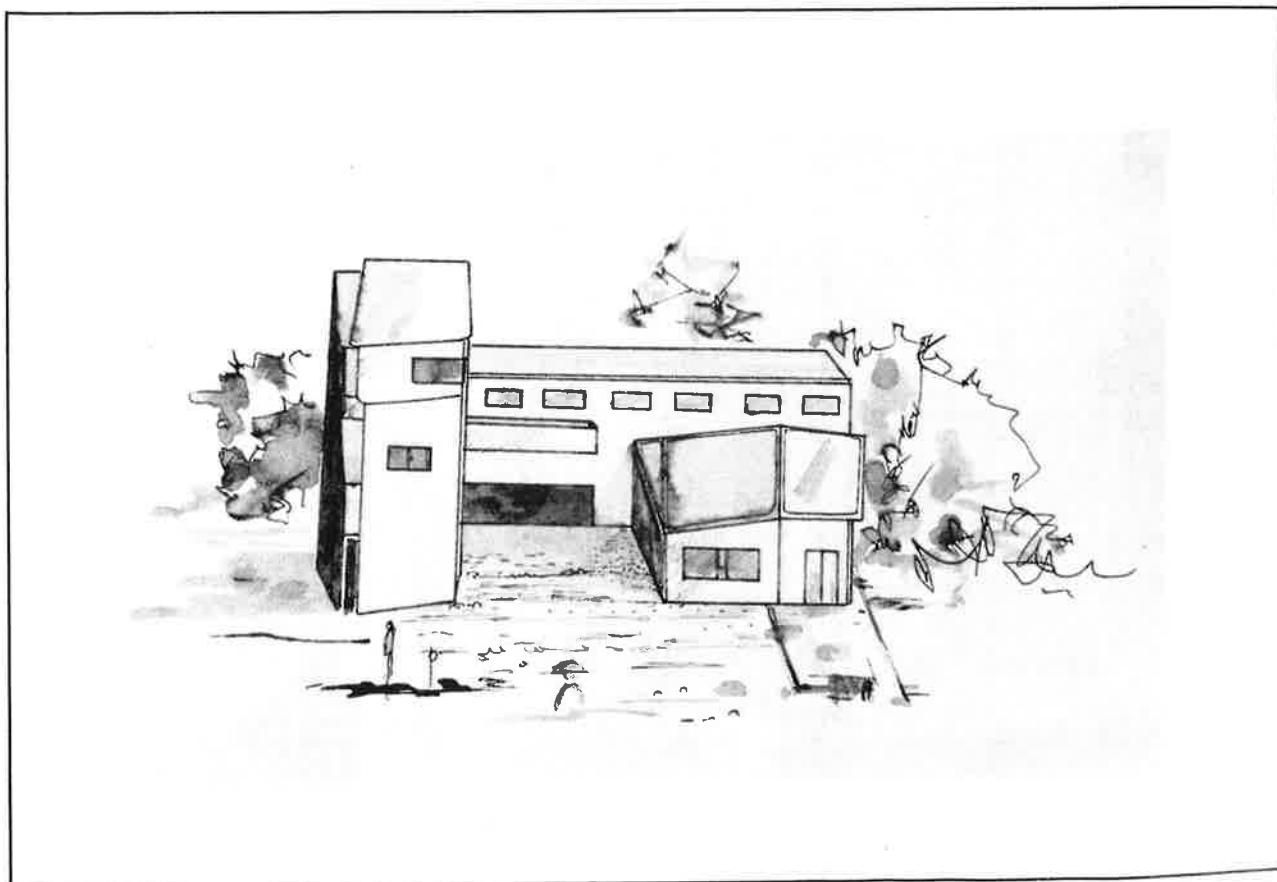
記念事業の概要

1. 記念会館建築
2. 第二運動場建設
3. 渋高50年誌編纂
4. 同窓会名簿作製
5. 正門改修
6. 本校舎周囲の舗装及び造園

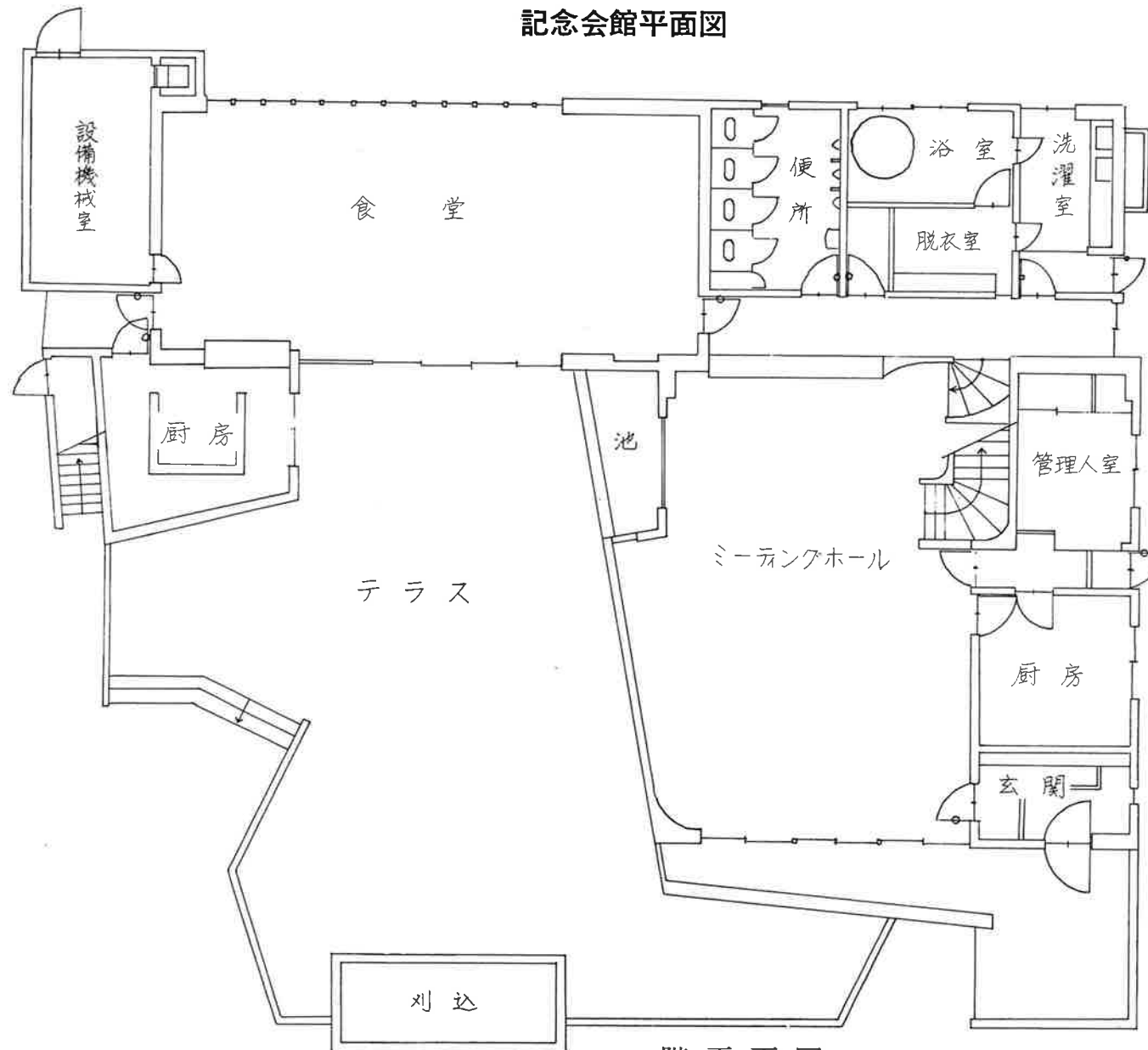
記念会館

- 建築地 校地北東隅（校長公舎跡）
- 設計 東京都立大学工学部 長倉康彦博士 ・ 伝設計事務所 伊藤伝三氏
- 施工 北部土建工業株式会社
- 構造 鉄筋コンクリート3階建
- 総面積 $451,55\text{m}^2$ （136.59坪）
- 費用 約3,000万円
- 完成予定 昭和45年12月

完成予想図

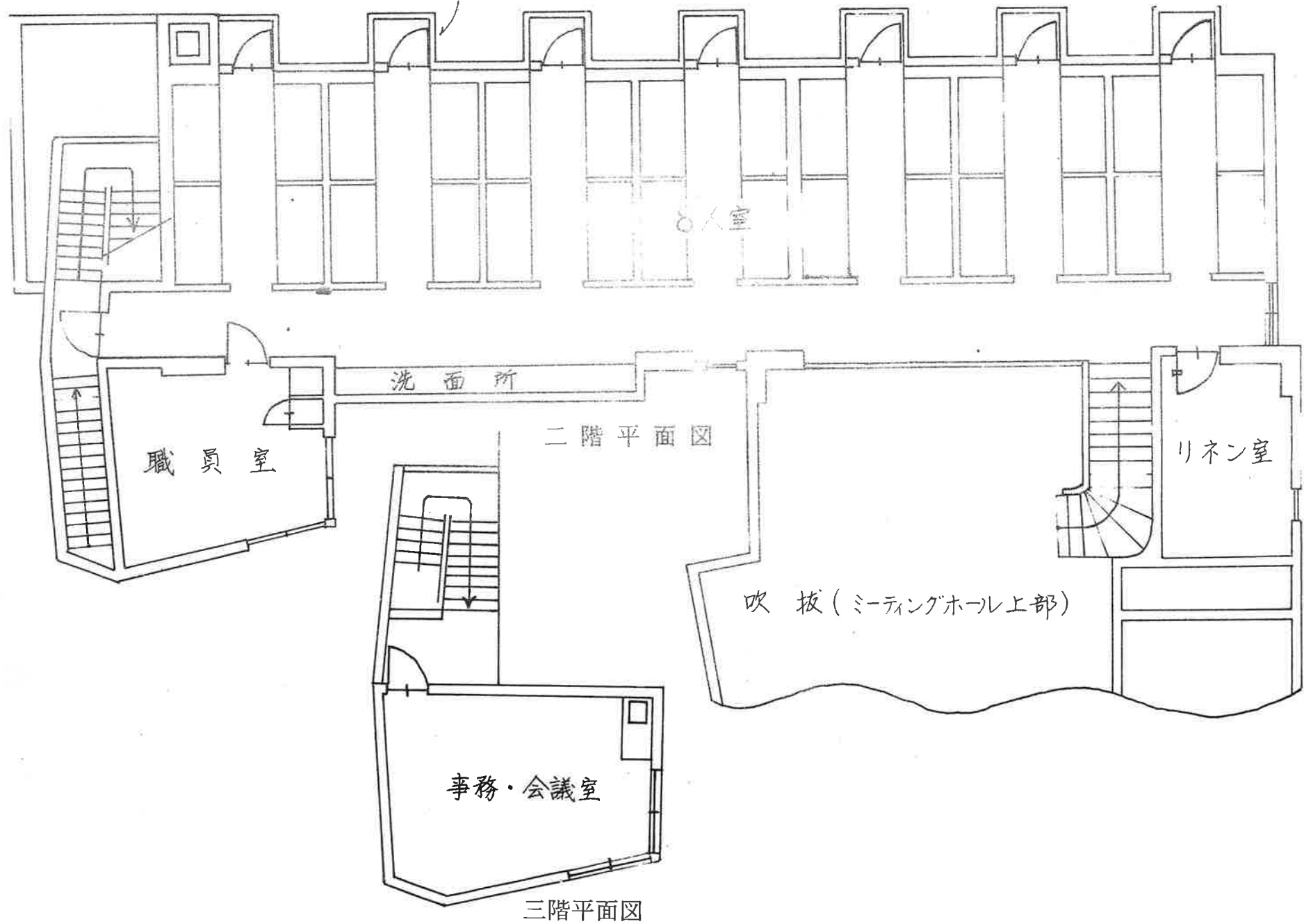


記念会館平面図



一階平面図

バルコニー



第二運動場位置及び新設図

第二運動場

- 建設地 渋川市阿久津字真木島351 (吾妻川河川敷)
- 総面積 約52,500 m^2 (約16,000坪)
- 費用 約1,000万円
- 完成予定 昭和46年3月

